

22p28

教科
適用 基督傳問題

フレックスブル
合著

卷 下

米國宣教師事務局藏版

OUTLINE BIBLE STUDIES
WITH WRITTEN ANSWER QUESTIONS.
THE LIFE OF CHRIST.

50 LESSONS.

VOL. II. LESSONS 26—50

BLAKESLIE & HARPER.



PUBLISHED BY
FUKUINSHA. JULY 1893.

34

62

研究法 基督傳問題

一年間の課題

「題目」

左に記する篇題の基督の生涯中の十の重なる時代を簡畧に解明のすなり亦章題の重に歴史上のあらわしを記す此等の各章を學ぶ時に能く心に止めんがため暗誦する事を要す

「各章に記す事柄」

各章に一々委敷事柄を明載せんは餘程の時を費やさざる可らず故に只爰に其大畧を研究するにあり此を詳らかく研究せんと欲せば數年を要する事なり

「章の研究法」

各章にある問題また註に於て視る可き二ツの要點あり
第一の基督の生涯の事柄の續きを明らかよすること
第二の各章にある肝要なる實理の採用あり此の一々年間研究により

基督の生涯を能く一と通り覺ゆ其教の要畧を述べ得ん事を望むなり

第一篇 基督の降誕並に三十年間普通の生活

第一章 道肉躰となれり

第二章 基督の幼時並に青年の時代

第二篇 傳道の準備

第三章 洗禮

第四章 悪魔を試らるゝ事

第五章 キリストとして世に知られ玉ふ事

第三篇 傳道の初まりユダヤに道を傳へ多くの人の注意を引き且つ其數人の弟子を作り玉ふ事

の弟子を作り玉ふ事

第六章 エルサレムの祝節即ちメシヤとして公然世に表れ玉ふ第一着殿を清め玉ふ事、ニユデモとの問答

を清め玉ふ事、ニユデモとの問答

第七章 ガリラヤに歸り玉ふ事並に井の傍にて婦と語りたる事

第四篇 第一ガリラヤ傳道すすく人望を得玉ふ事

第八章 會堂にて教を初め玉ふ事ナザレより退出されカペナオムに其住ひを移し玉ふ事

住ひを移し玉ふ事

第九章 總ての所有を捨て、從へと命じて四人の弟子を招き玉ふこと

多くの奇跡を爲し玉ふ事

第十章 働きの擴張、四人の弟子と共にガリラヤ傳道に従事爲し玉ふ第一着

一着

第五篇 基督傳道上の變革、安息日議問

第十一章 ユダヤ人の恐るべき反對の初まり、安息日の主ガリラヤにて、基督を爲さんとするひそかなる企の初め

基督を爲さんとするひそかなる企の初め

第十二章 降誕より傳道上の變革に至る迄の復習

第六篇 ガリラヤ傳道の續き、大に働きを爲し玉ひし時人々の中は彼を信するもの増加したる事然れどもパリサイ人の反對の増進せること

るもの増加したる事然れどもパリサイ人の反對の増進せること

第十三章 反對を意とせず進み玉ふ事、十二使徒を撰みし事、山上の説教

第十四章 山上の説教の續き

第十五章 バプテスマのヨハネの最後の使者

第十六章 十二使徒と共にガリラヤ第二傳道多の人彼のもとと集り其

食事の時をも得ざりき、パリサイ人と第一の爭論

第十七章 教への方法の變革譬の第一集

第十八章 傳道の大擴張、湖の東方に第一の旅行を爲す事、著しき奇跡の

一集

第十九章 ガリラヤ第三傳道即ち最後の傳道、十二人を二人づゝ、使ひし

たる事

第二十章 人望の極五千人を養ひ玉ふ事、其時人々イエスを王と爲さん

として彼に迫る

第二十一章 カペナオムの會堂にて人々イエスより離れし其初め

第七篇 ツロ、シドンの海濱デカポリス及びカイザリヤ、ビリビの市に徴行爲

し玉ふ事

第二十二章 イエスの名普く地方に擴まり之を防ぐ能わざりし事

第二十三章 イエス其十字架に付く事を告げ置き玉ふ事、其姿の變りた

る事

第二十四章 再びカペナオムに行玉ふ、ガリラヤを去る事、七十人を使は

し玉ふ事

第八篇 最後の近き大なる働きを爲し玉ふこと且つユダヤ、ペリヤよての大

危険

第二十五章 イエスの傳道上の變革よりガリラヤを去るとまでの復習

第二十六章 「カリホスマイ」の祝に於る事、イエスを捕へんとて企てし初

めイエス自ら世の光なりと呼び玉ふ事

第二十七章 殿清めの祝節、生つきの盲人、石よてイエスを打たんと爲し

二度目イエスエルダンの向ふに退き玉ふ事

第二十八章 ヘタニヤは歸りラザロを甦らし玉ふ事、サンヒドリムの會議にてイエスを殺さんと謀ること、イエス再びエルダンの向ふに退き玉ふ

第二十九章 安息日に付ての議論 エルサレムは最後の旅行をなし玉ふ事

第三十章 其旅行にてある譬を語り玉ふ譬の第二集

第三十一章 道よて多の譬をなす、イエス其死に付き語り玉ひし三度目の旅行の最後の近づき、エリコの起り事、二人の盲人とザーカイの事

第三十三章 ヘタニヤは着し夕方の食事を取る事

第九篇 最後の^{をばり}一週間 イエス傳教中最後の^{をばり}逾越の節
第三十四章 「カリホズマイ」の節より ヘタニヤに夕方の食事を取る事

での復習

第三十五章 日曜日と月曜日 エルサレムに関を揚げて入り玉ふ事、二度目の殿清め

第三十六章 火曜日傳道の最後の日、殿中の争ひ、イエスを捕へんと爲したるの初め、祭司の長 イエスの權威は付き尋問 イエス譬を以て答へ玉へり

第三十七章 殿よての争の續き、其敵彼等の法を變へ議論を以て イエスを試むること

第三十八章 火曜日續き イエス其の敵對するものを静め、彼等を認責爲し玉ふ傳道の終り

第三十九章 火曜日の夕 イエス殿を去り、其弟子に エルサレムの滅亡と世の終りを語る

註 水曜日 「イエス」 ヘタニヤにて休息しあらん

第四十章 大審判の日に付ての教訓

第四十一章 木曜日夕逾越節の食事及び晚餐

第四十二章 木曜日夜基督其弟子に最終の遺訓を爲す

第四十三章 弟子に最終の遺訓續き

第四十四章 木曜日金曜日の夜ゲツセマ子の園の祈

第四十五章 金曜日朝五度の詮議即ちユダヤ人により二度ローマ人に

由り三度

第四十六章 金曜日十字架に掛らる其葬

第十篇 キリストの甦並に昇天し榮光の主となる

第四十七章 甦し時五度あらわれたること

第四十八章 甦りて昇天迄四十日の間に五つ度あらわれたる事

第四十九章 昇天支配者ある主

第五十章 三十四章より四十六章まで即ち勝鬃を擧げてエルサレム

に往きし時より昇天まで

附言 一ヶ年中にハ日曜日五十二度あり故に毎日曜日の爲め五十二章

に分たざる可らず然れども其中ハ基督降誕祝日復活日傳道會

禁酒會其他の會集あれバ其が爲め日曜日を二度省き以て此に五

十章に分てり

第八篇

最後の近き大なる働を爲玉ふとニダヤベリヤに於ての大危険

註九 此の書は
月日の事を記す
の事

最後の一週を除きイエス十字架に釘られ玉ふ六
間にイエス三回エルサレムに至る然れど常人
人の爲め一度捕へられんとし玉ひ二度石よて

註四 此の書は
月日の事を記す
の事

を宜とす
第一章 道肉躰とされり
第二章 幼時と青

年との時代
第一章 降誕並に三十年間
第二章 幼時と青

第二篇 傳道の準備
第三章 洗禮
第四章 試み
第五章 其名の發揚さ

れしこと

第三篇 ヌマヤ傳道の初まり 第六章傳道を初む 第七章ガリラヤに
歸り玉ふ

第四篇 ガリラヤ傳道の初歩 第八章會堂に於て説教す 第九章四人
を撰ぶ 第十章ガリラヤ第一巡回傳道

第五篇 變革時代 第十一章安息日議論 第十二章復習
第六篇 重なるガリラヤ傳道 第十三章 第十四章使徒を撰ぶ山上の

説教 第十五章、バプテスマのヨハネ即ち最後の使者 第十六章ガリラ
ヤ第二巡回傳道ハリサイ人との激論 第十七章、壁の第一集 第十八章

湖の東岸に第一の旅行 第十九章第三巡回傳道 第二十章人望の極ま
り 第二十一章人々より見放らるゝこと

第七篇 微行 第二十二章、避所を尋求め玉ひしこと 第二十三章容貌
の變化 第二十四章ガリラヤの告別 第二十五章復習

第八篇 最後の近づき 第二十六章、構廬の祝節 第二十七章殿清の祝節
第二十八章、第二十九章最後の旅行を始め玉ふ、

第二十六章 イエス構廬の祝節に於て爲し玉ふこと
約翰傳七章十一節より八章五十九節まで

紀元二十九年第十月
銘句、イエスマた人々に語りて曰ける、我の世の光なり我に従ふ者の暗
中を行す生の光を得なり 約八〇十二、

約翰傳八章十二節より三十節まで朗讀すべし
第一 日課

日曜日午後 約翰傳七章十一節より二十四節まで
イエス其教につき辯論なし玉ふ

月曜日 約翰傳七章二十五節より三十六節まで
イエスの神聖なる原因を説き玉ふ

火曜日 約翰傳七章三十七節より五十二節まで

イエスの生の水なり

水曜日 約翰傳八章十二節より二十節まで

イエスの世の光なり

木曜日 約翰傳八章二十一節より三十節まで

イエスの眞のメシヤなり

金曜日 約翰傳八章三十一節より五十節まで

イエスユダヤ人を責め玉ふ

土曜日 約翰傳八章五十一節より五十九節まで

イエスの世の作られし初より在す事を示し玉ふ

日曜日 午後の課

第二 復習問題 能く研究すべし

一、第一篇中に於て如何なることを記憶するや

二、第二篇中に於て如何

三、第三篇中に於て如何

四、第四篇中に於て如何

五、第五篇中に於て如何

六、第六篇中に於て如何

七、第七篇中に於て如何

八、今日學ばんとする新しき篇題の何なるや

九、其篇中に記する事の幾何月の間のことなるや 註三十九を見よ

十、イエス何度エルサレムのあたりに行き玉ひしや

十一、何故其處に滞り給はざりしや

十二、ユダヤとペリヤとの何處よあるや

十三、此の章題如何

十四、其銘句を暗誦すべし

第三 聖書練習問題

- 一、新約全書始の四卷の名を述よ
 - 二、其次での四卷の名を述よ
 - 三、其次での四卷の名を述よ
 - 四、又其次の四卷の名を述よ
 - 五、希伯來書の前よある二の短き書を何といふや
 - 六、希伯來書の後にある八卷の何々なるや
 - 七、新約全書中よの幾卷あるや
 - 八、ヨハネによりて書れたる書の何なるや
 - 九、パウロの書きし書の何なるや
 - 十、ペテロのかきし書の何なるや
 - 十一、ルカより書れし書の何なるや
- 生徒之よ答ふること能はざるときに教師代て答ふべし

第四 日課物語

第十月ユダヤの構廬の節の時即ちイエスの十字架よつぎ玉ふ六ヶ月前イエス明にエルサレムの殿に行き人々を教へ且つ「人もし渴かば我よ來りて飲め」と曰玉へり、多の人々其誰なるを知らんとしてまどへり、茲にユダヤ人等の彼を殺さんと謀りしものども人を使はし彼を捕へしむ使されしもの共イエスの語り給ふ語をき、其異能あるに驚き之に手を下すものなかりき彼等歸りて曰ける「未だ斯人の如く言し人あらず」とパリサイ人等の反對するにも關はらずイエス人々を教をなし「我の世の光なり」と曰玉へり、また其神より來り玉ふを告げ玉へり、遂に反對者の大に怒り石を探りイエスに投んとす、イエス群集の中を通りて逃れ玉へり

第五 筆答問題

註四十一、總て問題の側の一行空ある處に答を記すべし、其他の口答なり答案の最も簡短よして意義を通ずる様にすべし、茲に學ぶの只其概畧のみなれば只其要用なるもの、みを記すべし、毎日の部分をなすべし

月曜日と火曜日の課

イエスを捕へんとせし其第一 約七〇十一―五十二

一、此時ユダヤにて行ふ何の節にイエスの預かり玉ひしや 約七〇二十四

二、此時人々イエスに就て如何なることを言しや 十二節

三、彼等またイエスに就て如何なることを尋ねしや 二十五、二十六節

四、イエスのキリストたることにつき如何なる拒をさせしや 二十七節

ユダヤ人の凡て人の知ざるとき不意にメシヤのあらはれんことを望めり

五、二十八節二十九節の意味如何

答 イエスの其敵者の知らざる神より使はれしといふ意味なり

六、また他の人のイエスに就き如何なることをいひしや 三十一節

七、パリサイ人等の何をなせしや 三十二節

八、節の終の日よイエスをなし給ひしや 三十七節暗誦

九、何故イエスの是の時如斯く玉ひしや

答 此の節の最も大切なる儀式の大なる喜びを以て殿に水を持來ることあり此の多分ホレアの岩を打たるときの水よ比へ紀念するものならん 出十七〇一―七、數二十〇七―十一

此の式をなしをるときイエス大聲を發し自ら生る眞の水なることを述べ玉ひし也

十、イエスに就て人々のもちし三の考の如何 四十、四十一節

十一、何故下吏イエスを捕へざりしや 四十五、四十六節

十二、パリサイ人下吏^{したやく}何^{なん}と曰^{いひ}しや 四十七、四十八節

十三、有司^{つひさ}の中^{なか}一人イエスに左祖^{さたん}せしもの誰^{たれ}なるや 五十、五十一節

此^この人^{ひと}につき他^たに知^しるところあるや 約三〇、三二、

水曜日と木曜日の課

イエスの世^よの光^{ひかり}なり 約八〇、二二―三十一、

十四、此^{この}後^{のち}イエス己^{おのれ}を指^さして何^{なん}といひ玉^{たま}ひしや 十二節 銘句

十五、何^{なん}故^{ゆゑ}イエス此^{この}言^{こと}をいひしや

答^{こたへ} 此^{この}節^{はなは}の時^{とき}に殿^をの中^{なか}の燈火^{とうか}燦然^{さんぜん}たり此^これ荒野^{あはれの}に於^おての火^ひの柱^{はしら}を紀^き

念^{おん}するためならん 出十三〇、二十一―二十二、四十〇、三十八、

凡^{まづ}て市^{まち}にて此^この夜光^{よるひかり}を照^てらすものなし故^{ゆゑ}に此^この燈火^{とうか}の最^もも目立^{めだ}て

明^あるしラビの言^{こと}へる如^{ごと}く其^{その}光^{ひかり}のエルサレム^{エルサレム}の全市^{しよ}を照^てすなり此^こをイ

十六、如^い何^{なん}ある意^い味^みよてイエスの世^よの光^{ひかり}なるや

十七、パリサイ人^{パリサイじん}がイエスを信^{しん}することを拒^{こぼ}みし時^{とき}何^{なん}と曰^{いひ}給^{たま}ひしや 十九節

十八、後^{のち}彼^{かれ}等^ら如^い何^{なん}あることを尋^{たず}ねしや又^{また}イエスの答^{こたへ}の如^い何^{なん} 二十五節

十九、イエスの初^{はじ}より何^{なん}といひ玉^{たま}ひしや

答^{こたへ} 神^{かみ}の子^こなることを告^つげ玉^{たま}ふ 約五〇、十七、十八、

二十、イエスの言^{ことば}の如^い何^{なん}なる結^{けつ}果^{くわ}を或^{ある}人^{ひと}よ來^きたせしや 三十節

金曜日と土曜日の課

イエスを石打^{いしうち}にせんとせし第一^{だいいち} 約八〇、三十一―五十九、

廿一、パリサイ人^{パリサイじん}のイエスを信^{しん}せざるの何^{なん}故^{ゆゑ}なりと曰^{いひ}給^{たま}ひしや 四十七節

十二

十二
廿二、イエスの道を守るものよつき何と曰給ひしや 五十一節

廿三、此の言の意味如何

答 イエスと偕し永遠生くるといふ意味なり

廿四、アブラハムに就て如何なることを曰給ひしや 五十六節

廿五、ユダヤ人イエスに何と答へしや 五十七節

廿六、イエスの之よ何と返答しや 五十八節

廿七、イエスの我のアブラハムより前にありと曰給ひし意味は如何

答 イエスの此の世に降り玉ふ以前の父なる神と共にあるといふ也

約一〇二二、二七〇五を参照すべし暗誦せよ

廿八、此の時ユダヤ人イエスを如何よせんと謀りしやイエス如何して逃しや

五十九節

第二十七章 イエス殿清の祝節より行き玉ふこと

紀元二十九年十二月

銘句、我の善牧者よて己の羊を識るまた己の羊よ識らる父われを識る如く我も父を識るわれ羊のために命を捐ん 約十〇十四、十五

約翰傳十章一節より十六節まで朗讀すべし

第一 日課

日曜日 午後 路加傳十章十七節より二十四節まで

七十人の弟子の歸り

月曜日 路加傳十章二十五節より四十二節まで

善サマリヤ人の比譬

火曜日 路加傳十一章一節より十三節まで
熱心なる祈を爲すを賞す

水曜日 約翰傳九章一節より二十三節まで
生來なる善の醫されし事

木曜日 約翰傳九章二十四節より四十一節まで
信すること、不信事

金曜日 約翰傳十章一節より二十一節まで
善牧者なるイエス

土曜日 約翰傳十章二十二節より四十二節まで
イエスと父との只一なり

日曜日 午後の課

第二 復習問題

一、今學びつゝあるは何篇あるや

二、イエス其死の六ヶ月前エルサレムよていかなる節にあづかりしや

三、節の終の日イエス自をさして何と日給ひしや 約七〇三十七

四、節の中如何なる儀式をとりてかく日給ひしや

五、ニダヤの有司達イエスをいかにせんと謀りしや何故彼等の其企てを遂げ

ざりしや

六、ニダヤの光輝よりてイエスの自らの事を何と日給ひしや

七、イエス自らとアブラハムに就て如何なることを語りしや

八、ニダヤ人イエスに如何あることをおさんとせしやイエス如何にして逃れ

玉ひしや

九、此の章題の如何

十、其銘句を暗誦せよ

第三 聖書練習問題

一、生徒中の一人新約書の諸巻を名指し他の生徒をして其諸巻を見出し且つ

其畧字を記さしむべし

二、イエスを捕へんとせし第一の企よつきての話の約翰傳の何章に記しあるや

三、イエスを初めて石にて打んとせしことの何處に記しあるや

四、舊約書の初の六卷を述よ

五、其に次での六卷を述よ

六、また其に次での六卷を述よ

七、生徒中一人舊約書の諸卷を名指し他の生徒をして各書を見出し且つ其畧字を記せしむべし

八、キリストの時代にパレスチナの幾部に分れをりしや

九、ヨルダン河の東國を何といふや

第四 日課物語

此の章に「構慮の節にて起りし事と殿清の節との二ヶ月の間に起りし事蹟を記す此の事蹟中の重なるものハイエスの福音を世に傳ふるため遣はし玉ひし七十人の歸りしこと善サマリヤ人の比喻等なり此間イエスは多分ユダヤ即ちエルサレムの近くにいませしならん一度ベタニヤのマルタ、マリヤの家へ行き玉へり殿清の節の安息日は於てイエス生來の替をいやし玉ふ替イエスを確く信せり然どパリサイ人等イエスが安息日へ行し玉ひしにより大に憎めり其後イエス善牧者の比喻を語り玉ふ此時またユダヤ人大に其言によりて怒りふた、びイエスを石にて打んとせり是よりてイエス彼等を逃れヨルダン河の向ふに至れり

第五 筆答問題

月曜日の課

七十人の歸り並よ善サマリヤ人の比喻 路十〇十七—四十二

一、七十人の遣はされし何時なりしや 路十〇二(第二十四章を見よ)

二、彼等歸りて如何なることを喜びしや 十七節

三、イエスの如何なることを以て喜ぶべしと曰給ひしや 二十節

四、天に其名を記さるとの如何なる意味なるや

五、我が隣人をバ誰なるかとの問に答へて如何ある話を語りしや二十九節

卅七節此の話をよく讀みくわしく述べしまた傷を受けし人を見し三人の如何なるや彼等の何をなせしや

六、キリスト彼等に命せし如く爲さば凡ての子女達が家また學校よりありて如何なる結果を及ぼすや

七、此時イエス誰の家に至りしや(三十八、三十九節)何處なりしや 約十一〇一、

火曜日 火曜日の課

イエス其弟子に祈禱を教へ玉ふ 路十一〇一—十三、

八、弟子の一人イエスに何を尋ねしや 一節

九、イエスの如何なる祈を以て之に答へ玉ひしや二節—四節また之と同じ祈を何時與へ玉ひしことあるや 太六〇九—十三、

十、熱心なる祈の必要を説き玉ふに如何なる話を語りしや 五節—八節

十一、如何なる約束を以て祈をなすを勵まし給ひしや九節—十三節九節十節を暗誦すべし 太七〇七一—十一と参照すべし

水曜日と木曜日の課

生來の誓を醫し玉ふこと 約九〇一—四十一、

十二、イエス此の奇跡をいかにして成し玉ひしや(六—七)此の奇跡の他に異なる

處の如何 太九〇二十七一三十可八〇二十三一二十二

十三、此の奇跡の何時あされしや之につきパリサイ人何といひしや 十四、十六節

十四、此の奇跡を見しにも關わらず彼等のイエスよつき何といひしや 二十四節

十五、いやされしもの彼等よ何と答へしやまたいかにイエスの神より來り玉

ひしを説きしや 三十節より三十三節まで特別三十三節

十六、其時パリサイ人等彼に如何なることをあせしや 三十四節

十七、イエスの誰なることを知りし時彼いかにせしや 卅五節―卅八節特別卅八節

十八、何故パリサイ人のイエスを信することを好まざるや

金曜日の課

善牧者の比喩 約十〇一―二十一

十九、此の比喩の初めよイエス自らを指して何と曰給ひしや 七、九節(九節暗誦)

二十、其意味の如何

答、我等神よより救われんと欲せば只キリストによるの外なきなり

廿一、此の比喩の終よ於てイエス自らをさして何と曰給ひしや 十一、十四節

廿二、此の意味の如何

答、牧者が其羊をよく守る如くイエスの我曹を守り玉ふをいふことなり

廿三、イエスの自ら其羊よつき何といひしや 十四、十五節 銘句

土曜日の課

イエスを石にて打たんとせし其第二 約十〇二十二―四十二

廿四、此の時イエスは何處に居玉ひしや 二十二、二十三節

廿五、ユダヤ人イエスに如何なることを尋ねしや 二十四節

廿六、イエス彼等に何と答へ玉ひしや 二十五節

廿七、事との如何ある意味あるや例を擧よ

廿八、其羊の安全なることよつさ何といひしや 廿七、廿八節、暗誦

廿九、イエスと其父につきて如何なることを曰給ひしや 三十節

三十、此時ユダヤ人イエスを如何にせんと謀りしや 三十一節

卅一、彼等より逃れて何處に行き玉ひしや 四十節

第二十八章 ラザロの甦

約翰傳十一章一節より五十七節まで

紀元三十年第一月二月

銘句 イエス彼に曰けるは我の復生なり生命あり我を信するもの死ぬるとも生べし凡て生て我を信するものは永遠も死ぬることなし

約十一〇二十五、二十六、

第一 日課

日曜日 午後 約翰傳十一章一節より十六節まで

イエスヘタニヤよ迎へられ玉ふ事

月曜日 約翰傳十一章十七節より三十二節まで

マルタマリヤ等と語り玉ふ事

火曜日 約翰傳十一章三十三節より四十四節まで

ラザロ死より復生する事

水曜日 路加傳七章十一節より十七節まで

ナインの寡婦の息子の事

馬可傳五章三十五節より四十三節まで

ヤイロの娘の事

木曜日 列王記上十七章十七節より二十四節まで

ザレバタの寡婦の息子の事

列王記下四章十八節より三十七節まで

シユナミの婦人の息子の事

金曜日 約翰傳十一章四十五節より五十三節まで

イエスの死の定めらるゝ事

土曜日 約翰傳十一章五十四節より五十七節まで

イエスエツライムに避け玉ふの事

日曜日 午後の課

第二 復習問題

一、此の前の二章の題の如何

二、二祝節の紀元何年何月より起りしや

三、第二の祝節の其後幾月後にありしや

四、此期イエスの何處にをり玉ひしや

五、此時イエスの如何なる美はしき比喻を語り玉ひしや

六、如何なる祈禱をイエス再び其弟子に教へ玉ひしや

七、殿清の節のとき如何なる奇跡をなし玉ひしや

八、此の奇跡をなせし後如何なる比喻を語り玉ひしや

九、其羊の安全ありしことにつき何といひ玉ひしや

十、イエスと其父よつき如何なることを語りしや

十一、其時ニダヤ人イエスに如何なることを企てしや

十二、此章題如何

十三、其銘句を暗誦せよ

第三 聖書練習問題

一、イエスが神の羔として呼ばれ玉ひしところの約翰傳何章にあるや

二、イエス傳道をなし玉ふ初に過踰節よてあし玉ひしことは何處に記しあるや

二、約翰傳三章に如何なることを記しあるや

四、第四章に如何なることよつき記しあるや

五、約翰傳五章にイエス生涯中の重なることよつき如何に記しあるや

六、第六章に如何なることを記すや

七、ニダヤ人がイエスを初めて捕へんとせしこと并に初めて石よて打たんと

せし何節の時あるや

八、ニダヤ人がイエスを石よて打たんとせし二度目の何節の時なるや

九、舊約全書詩篇の前よ幾巻あるや

十、其中の數巻を擧げよまた其處を見出すべし

十一、詩篇の後よある三巻を擧よ

十二、詩篇の幾篇あるや

十三、第一篇の何よ就て記しあるや最終の篇の何よ就て記しあるや

第四 日課物語

殿清の節よりイエスの死までの六ヶ月ありラザロの復生の此の間にありし
かり節と奇蹟の中に如何なる事が起りしやイエスのヨルダン河の東岸ペリ
ヤに於て教へ玉ひし外は識る能ざるなり其處よありてイエスの愛し玉ふべ
タニヤのラザロの病を報知せり然れどもイエス其報を得し後二日目迄の行
玉のざりきイエスベタニヤに行玉ひし時はラザロ既よ死して四日目になれ
り是よ於て其姉妹の泣悲めるを慰め彼等とともに墓に至れり墓の洞よて其

口の所そこに石いしを置おけりイエス其石そのいしを去およと命いのちじ玉たまひ神かみよ祈いのりをさし大聲おほいよ呼よびけり
けるハラザロよ出いよ死者しよ復よ生あ出いで來きれり此この一大だい奇き蹟せきを見みて多おほく彼かれを信しんぜり
然しかれども祭司さいしの長なが等たちイエスを死しよ定さだめんとて評ひやう議ぎをなせりイエス此これより逃のがれて去さり野のよ近ちかきエフライムといふ所ところに至いたり其後そのちふた、ビヨルダン河がはの東ひがしに歸かへり玉たまひしならん

第五 筆答問題 第二十六章註四十一を見よ

イエスベタニヤよ呼よ迎むかへらる 約翰傳十一章一節より十六節まで

一、ラザロの誰たれの兄弟きょうだいなるや又またた何處どこよ住すみしや 一二節

二、此時このときイエスの何處どこよありしや 約十〇四十、

三、彼のかれの姉妹あねいまいイエスよ如何いかなる使者つかひを發はせしや 三節

四、此この使者つかひの言ことばをき、イエス何なんと謂い玉たまひしや 四節

五、其後そのちイエスの如何いかさんと決けつし玉たまひしや 七十一節

六、イエス死しといふ語ことばを變かへ何なんと曰い玉たまひしや 十一節(太九〇二十四引合すへし)

七、何故なにゆゑイエスの弟子でし等たちベタニヤに行いくを望のぞまざりしや 八節十六節引合せよ

月曜日の課

イエス、マルタ、マリヤと偕ともに語かたり玉たまふ 約翰傳十一章十七節より卅二節迄

八、イエスベタニヤよ至いたり玉たまひし時ときラザロ死しして幾日いかにちゆ目めなりしや 十七節

九、ベタニヤのエルサレムより幾里いかにりあるや 十八節

十、マルタ及びマリヤを慰めんためエルサレムより來りしもの誰なるや

十九節

附言 ラザロの家の富家又貴族の親屬をもちしならん故にエルサレムよ

る名高き人等姉妹を慰めんため來りたるならん

十一、イエスベタニヤに達せし時イエス見へんため初めて來りしもの誰
なりしや 二十節

十二、其女イエス何と云ひしや 二十一、二十二節

十三、イエス自よ關して如何ある大眞理を語り玉ひしや 二十五、二十六節 録句一同

略圖せよ

十四、マリヤイエスが己を見んと望み玉ふとき如何よせしや 二十八、二十九節

十五、彼女イエスを見しとき何をなせしや 三十二節

火曜日

ラザロを復生す 約翰傳十一章三十三節より四十四節まで

十六、イエスマリヤの悲めるを見て何をなし玉ひしや 三十三より三十五節

十七、是を見てユダヤ人何と曰しや 三十六節

十八、ラザロの葬られし所を説示すべし 三十八節

十九、イエス彼等に何をせよと命せしや 三十九節

二十石の去られし後イエス何をなし玉ひしや 四十一より四十三節

廿二、イエス如此言し後如何あることが出来しや 四十四節

水曜日

復生につきて他の奇跡 路加七章十一節より十七節まで馬可五章三十五節

より四十三節まで列王記上十七章十七節より二十四節まで列王記下四

章十八節より三十七節まで

廿二之と等しき他の奇跡を擧げよ

總て記する話しを能く讀みて其要点を記載しおき而して自らの語を用ひて述べし組の中一人づゝ述べしむべし

路七〇十一一十七

可五〇三十五一四十三

列上十七〇十七一二十四

列下四〇十八一三十七

廿三、エリヤまたのエリミヤにても此等の奇跡をイエスがあせし如く自らの力よてなせしや或の神より力を受けてなせしや

イエスの奇跡を行玉ふところと彼等のあすところとの差異をのべよ
金曜日と土曜日の課

奇跡の結果 約翰傳十一章四十五節より五十七節まで

廿四、ラザロの復生の多のユダヤ人は如何ある結果を及ばせしや 四十五節

廿五、祭司の長とパリサイ人等何をなさんと謀りしや其理由を述よ 四十七節

廿六、祭司の長なるカヤパのイエスを如何にせんとせしや 四十九、五十節

廿七、カヤバの此言を吐きしハイエスが現世は生活しをるから人々に害を興ふると考へしによるか又死に定むる事をゆるさんとの望をもちをりし故なるや

廿八、イエスのユダヤ人の爲のみに死し玉ひしや或ハ全世界のためなるや
五十一、五十二節

廿九、此時よりしてパリサイ人何をせんともとめしや 五十三、五十七節

三十、イエス何處ゆき玉ひしや 五十四節

第二十九章 イエスエルサレムに最後の旅行を初め玉ふ其途中にて起りし事蹟

路加傳十三章十節より十四章三十五節まで

紀元三十年第二月或ハ三月

銘句 イエス教つ、各城各郷を過ぎエルサレムに向て旅行し或人いひけるの主と教る、者ハ少なきカイエス彼等に曰けるハ窄門に入るためよ力を盡せ我なんぢらに告ん入ん事を求て能ざる者おほし

路十三〇二十二―二十四、

路加傳十四章七節より二十四節まで朗讀すべし

第一 日課

日曜日 午後 路加傳十三章十節より二十一節まで

安息日につきての議論

月曜日 路加傳十三章二十二節より三十節まで

救に必要ある事

火曜日 路加傳十三章三十一節より三十五節まで

イエスヘロデの云ひし事よつき誠め玉ふ

馬太傳二十三章三十七節より三十九節まで

イエスエルサレムにつきて歎き玉ふ

水曜日 路加傳十四章一節より十四節まで

イエス筵よ居玉ふ

木曜日 路加傳十四章十五節より二十四節まで

大なる筵の比喩

金曜日 馬太傳二十二章一節より十四節まで

婚筵の比喩

土曜日 路加傳十四章二十五節より三十五節まで

直正弟子たる資格

日曜日午後ノ課

第二 復習問題

一、イエスの十字架に釘られ玉ふ前十二月の殿清の節の後何處に行玉ひしや

二、イエスの許に使者を送りし者の誰なるや其理由を述よ

三、何故其弟子達イエスの諾ひ玉ふを好まざりしや

四、ベタニヤに着き玉ひし時初めにイエスに逢に來りし者の誰なるや

五、イエス己に關して如何なる異能ある眞理を語りしや 第二十八章銘句

六、イエス如何にしてラザロを甦らせしや其模様を語れ

七、此と同じき奇跡を他に知ることありや

八、奇跡に由り祭司の長等イエスに如何なる事をなさんと謀りしやイエス何

處に逃れ玉ひしや

九、此章の題の何なるか

十、其銘句を暗誦すべし

第三 聖書練習問題

一、左よ記するところを一同朗讀すべし

賽五十五〇一、約三〇十六、使四〇十二、羅五〇一、黙二十二〇十七、哥前十三〇

- 一、キリストの時代にパレスチナの北部を何と名びしや
- 二、中部を何といふや
- 三、南部を何といふや
- 四、エルダン河の東岸にある何の部あるや
- 五、新約書にて希伯來書の後にある諸卷の何々なるや
- 六、舊約書の最初の五卷の何々あるや
- 七、舊約書の最終の書名をのべよ

第四 日課物語

此の篇中記する事蹟の順序の甚だ不分明なり、ラザロの復生の後イエス暫くエフライムに止まり而てふた、びエルダンの東に往き玉ふ茲にまたイエスパリサイ人と安息日につき衝突をなす其故の安息日に鬼に患へられたる婦をいやしかつ水腫病の者をいやし玉へばかり十字架に釘られ玉ふ時の近づきければイエスエルサレムに向つて最後の旅立をせし玉ふ其途すがら市々を歴行大なる權威と慈恵とを以て人々に教へ玉へり路加傳十四章より第八章ある彼の美のしき比喻も此の期に語り玉へるなり此の中の初ある大なる筵の比喻は此章に於て學ぶべし

第五 筆答問題

- 安息日につきての議論 路十三章十一二十一節
- 一、安息心よペリヤに於て如何なる奇蹟を行ひしや 十一十三節
- 二、會堂の司此よつき如何に考へしや 十四節
- 三、人々如何に感せしや 十七節
- 四、イエスが安息日よ奇蹟を行し玉ふ事よより以前よ如何なる事が起りしや

月曜日と火曜日の課

イエス最後の旅行を初め玉ふ 路十三章二十二―三十五節

五二十二節より二十四節迄にイエスのエルサレム最後の旅行よつぎ何と記しあるや 銘句一同暗誦すべし

六二十四節の初に窄き門に入るとの如何なる意味なるや

七何故我曹の天國に入らんことを望まば熱心あること必要あるや

八其日パリサイ人イエスに向ひ何といひしや 三十一

附言

イエスの狐と(三十二節)呼び玉ひしアンチパスへロデのニダヤのみならずペリヤガラヤ全國を統御せりへロデ及びパリサイ人等のイエスのニダヤに歸らんことを望みたり 三十三三十三節

九イエスの何處にて死すべきことを告げしや 三十三節

十假令冷遇せられしと雖イエスはエルサレムにつき何といひ玉しや 三十四節暗誦

十一此より見て見ればイエスの其敵と對する感情の如何ありしや

太五〇四十四を引合せよ

水曜日の課

イエス筵に居り玉ふ 路加傳十四章一より十四節

十二イエス安息日何處より行さしや 一節

十三其處よて如何なる奇跡をなせしや 二節より四節まで

十四奇跡の説明の如何ある意味あるや 五節(太十二〇十一、十二)を引合せよ

十五、七節より十一節までよてイエス人々の筵（ふるまひ）よて首座（ひみざ）を得んと求むるを見
て如何なる感（かんじ）をもち玉ひしと考ふるや

十六、我曹（われら）の人々が只自己（ただおのれ）の爲めのみ善からんことを望み求むる者につき如
何に考ふるや

木曜日と金曜日の課

大なる筵（ふるまひ）の比喻 路加傳十四章十五—二十四 太二十二〇—一十四を引合せよ

十七、此の筵の時如何ある比喻をかたり玉ひしや 十六節より二十四節まで

十八、此の比喻の家の主人との誰を指せるや

十九、大なる筵との如何ある意味なるや

二十、馬太傳廿二章二節よ同き事何とあるや

廿一、筵に來る能（あた）ひざることよつき一人の何と辞（こと）はりしや 十八

廿二、他の人の何といひしや 十九節

廿三、三人目の者の何といひしや 二十節

廿四、此の斷りの正當なるやまた不正當なるや

廿五、近時に至ても或る人の神を信じ仕る事よ付斷を言ふ者あり其例を擧よ

廿六、後如何なるものが招かれしや 二十一、二十三節

廿七、總てのもの筵にあづかりしや或の招をうけしもののみあるや又たこれ

に由て如何なる教を學ぶや

土曜日の課

キリストは従ふこと 路加傳十四章二十五―三十五節

廿八、イエス又其弟子達に必要なることにつきて何を語りしや 二十六節暗誦

廿九、其意味の如何

答 總てのもの、中第一にイエスを愛すべきなり

三十、十字架を負て彼に従ふことよつとき何をかたりしや

二十七節太十〇三十八、十六〇二十四を引合

卅一、其意味如何

答 如何なる場合も於てもまた何處もありとも常に彼に事ふべきなり

第八篇續き

最後の近づきて大なる働を爲し玉ふことニマヤヘリヤに於ての大危険

此の篇中よて既よ四章を學ひたり他の四章の註四十二よ示す

第二十六章註卅九を見よ

註四十二 略題復習 屢々此の題を研究すべし

第一篇 降誕並よ三十年間 第一章、道肉躰となれり 第二章、幼時と青年との時代

第二篇 傳道の準備 第三章、洗禮 第四章、試み 第五章、其名の發揚されしこと

第三篇 ニマヤ傳道の初まり 第六章、傳道を初む 第七章、ガリラヤに歸り玉ふ

第四篇 ガリラヤ傳道の初歩 第八章、會堂よて説教す 第九章、四人を撰ぶ

第五篇 變革時代 第十一章、安息日の議論 第十二章復習

第六篇 重なるガリラヤ傳道 第十三章、第十四章、使徒の撰び山上の説

教 第十五章、バプテスマのミハ子即ち最後の使者 第十六章
 ガリラヤ第二巡回傳道パリサイ人との激論 第十七章、譬の第
 一集第十八章、湖の東岸に第一の旅行 第十九章、第三巡回傳道
 第二十章、人望の極點 第二十一章、人々より見放らるゝこと
 第七篇 微行 第二十二章、避所を求め玉ひしこと 第二十三章、貌の
 變り 第二十四章、ガリラヤに告別 第二十五章、復習
 第八篇 最後の近づき 第二十六章、構廬の祝節 第二十七章、殿清の祝
 節 第二十八章、ラザロ 第二十九章、最後の旅行を始め玉ふ
 第三十章、旅行の比喩 第三十一章、途中よて教ゆ 第三十二章
 エルサレムに近よる 第三十三章、ベタニヤにての夕食 第三
 十四章、復習
 第三十章 旅行中の比喩、比喩の第二集
 路加傳十五章、十六章 紀元三十年二月或の三月

銘句、われ汝等に告ん此の如く一人の罪ある人悔改めなば神の使の前よ
 喜あるべし 路十五〇十、

路加傳十五章一節より二十四節まで朗讀すべし

第一 日課

日曜日 午後 路加傳十五章一節より七節まで

失ひし羊の比喩

路加傳十五章八節より十節まで

失ひし銀一枚の比喩

月曜日 路加傳十五章十一節より二十四節まで

放蕩息子の比喩の初め

火曜日 路加傳十五章二十五節より三十二節まで

放蕩息子の比喩の終り

水曜日 路加傳十六章一節より八節まで

不正ある操會者の比喩

木曜日 路加傳十六章九節より十三節まで

不正ある用金

金曜日 路加傳十六章十四節より十八節まで

パリサイ人の誹謗

土曜日 路加傳十六章十九節より三十一節まで

富者とラサロの比喩

日曜日午後の課

第二 復習問題

一 今學びつゝあるの幾篇なるや

二 幾月間なるや 註三十九を見よ

三 此の期中ユダヤにて如何なる二祝節ありしや其祝節の何時行われしや

四 初の祝節にてイエスに如何なること起りしや

五 第二の祝節よての如何

六 第二の祝節の後イエス何處に行きしや

七 イエスふたゝびエルサレムの近傍に歸りし何故なるや

八 此時何處に行きしや

九 此等の旅行を地圖にて示すべし

十 筵の時イエスパリサイ人の家にて如何なる比喩を語りしや此の比喩は我

曹よ何を教るや

十一 此の章題は如何

十二 其銘句を暗誦すべし

第三 聖書練習問題

一 譬の第一集の馬太傳何章にあるや

二 海邊にて語りし何々なるやを述よ 可四〇二十六―二十九を見よ

三 家にありて弟子等に語りし何々なるや

- 四、此等の譬の概して何につきて語りしなるや
- 五、此等を語る前にパリサイ人とイエスとの間に如何なること起りしや
- 六、此等を語りし後夕方何處に行きしや又た途中にて如何なることありしや
- 七、ヘルモン山のパリサンの何部にあるや
- 八、カルメル山の何處にあるや
- 九、エバル並にゲリシム山の何處にあるや此の近傍までイエスよつきて如何なる出来事ありしや
- 十、此山の間ニエルダン河の流れ居るや
- 十一、何湖を通過して流るゝやまた何海に注ぐや

第四 口課物語

一、イエス海邊までまた家にての其弟子達に譬の第一集を語りし此れ重なるカリヤヤ傳道の中頃なりしからん其後一年許の間は別にたとひにつきて語り玉ふところなし然れどもエルサレム最後の旅行をなし玉ひし時

た多の譬を語り玉ふ其譬を此章まで學ぶあり路加傳十五章よ三つあり即ち失ひし羊のたとへ失ひし銀放蕩息子此のたとへを恩慈のたとへといふ如何となれば神の人を愛しかつ助け玉ふを教ゆればなり

第五 筆答問題 第二十六章註四十一を見よ

月曜日と火曜日の課

失ひし羊と銀の比喻 路可傳十五章一より十節

一、此の時如何なる人々イエスの許に集りしや又た何故に集りしや 一節

二、此よ逆らひしの誰なるや 二節

三、パリサイ人のつぶやきよ對して如何なる比喻を語りしや 三節より七節まで

四、此の比喻を以前よ語り玉ひしの何時なりしや又た何の爲めなりしや

五、此の比喩よて失ひし羊との何をいふなるや

六、羊の持主の誰あるや

七、此の比喩よ由りキリストの人を愛し玉ふことにつき何を教ゆるや

八、一人の悔改者あらば天に於て幾何の喜あるや 七節暗誦

九、此時語り玉ひし第二の譬を暗誦すべし 八節より十節まで

十、何故此の二譬の失ひしものを尋ぬることにつき語りしや

十一、今イエスの如何にして失ひしものを尋出し玉ふや

水曜日と木曜日の課

放蕩息子の比喩 路加傳十五章十一節より三十二節

十二、弟息子に其父に何を求めしや又た何故あるや 十二節

十三、弟息子其より如何にせしや 十三節

十四、其後彼の如何よありしや 十四節より十六節まで

十五、彼の身に來りし困難の如何なる結果ありしや 十七節より十九節まで

十六、此の惡子の誰を指すや

十七、其父彼を如何に待遇しや 二十節

十八、彼其父に何といひしや 二十一節暗誦

十九、父彼に何と答へしや 二十二節より二十四節まで暗誦

二十、此の語の神が其赦を願ひ出でたるものを如何に受け玉ふやといふことを教ゆるや

廿一、兄の父の其弟に對する親切を見て如何なる感起せしや(二十五節より二十八節まで)彼の行狀よつゝ如何に思ふや

廿二、此の比喩を語り玉ひし所以を考ふれば此の兄との誰を指すや 二三、節

金曜日と土曜日の課

議論問題

廿三、此の始め二の比喩に於て罪人を如何に説示したるや第三の比喩にて如何

廿四、此の始の二比喩に於て神の罪人に對するに如何なることを説示すや第三よつゝ如何

廿五、蕩子自ら省悟るとの如何なる意味あるや 十七節

廿六、彼其父の赦しを受く前に如何なることを爲すが必要あるか

十八節より二十節初まで

廿七、凡て罪人の先づ神の赦を願ふ前に何をなす事必要なるや

廿八、死てまゐ生との如何なる意味か 廿四節廿二節弗二〇一五約一三〇十四、引合すべし

註四十三 不正なる操會者の比喩の(路十六〇一十三)天に寶を積むために(太六〇十九二十)財産を用ゆるの必要を教ゆ富者とラザロの比喩の(路十六〇十九一三十一)財の私用を訓め玉ふあり

第三十一章 最後の旅行續き、途中にて教へ玉ふ

路加傳十七章一より二十より三十七節十八章一より三十節馬太傳十
九章馬可傳十章二節より三十一節

紀元三十年第三月

銘句

イエス嬰兒をよび弟子に曰けるの嬰兒を我よ來らせよ彼等を禁る

勿れ神の國は居るもののは是の如きものなり 路十八〇十六

馬可傳十章十三節より三十一節を朗讀すべし

第一 日課

日曜日 午後 路加傳十七章一節より十節まで

免し信仰謙遜

月曜日 路加傳十七章二十節より二十七節まで

キリスト不意に來る

火曜日 路加傳十八章一節より十四節まで

祈よつき二比喩

水曜日 馬可傳十章二節より十二節まで

離縁につきての教

木曜日 馬可傳十章十三節より十六節まで

キリスト嬰兒を祝し玉ふ

金曜日 馬可傳十章十七節より二十三節まで

富める若き宰

土曜日 馬可傳十章二十四節より三十一節まで

富者よつきての話

月曜日午後の課

第二 復習問題

一、當時ヘタニヤにて如何かる著き奇跡をなせしや

二、其後何地に行きしや

三、如何かる旅行をなしつゝありしや

- 四、當時安息日如何なる二奇跡をみせしや
- 五、パリサイ人と食事をなし玉ふ時如何なる比喩を語りしや
- 六、恩慈の三比喩を述よ
- 七、此等の比喩の罪人につき如何なる教をなすや
- 八、神よつきての如何
- 九、此の章題如何
- 十、其銘句を暗誦すべし

第三 聖書練習問題

- 一、此の前よ學びし二章の何書より探りて語りありしや
- 二、蕩子の比喩の其何章にあるや
- 三、同章にある二比喩は何々あるや
- 四、ラザロの復生の話の何處にあるや
- 五、新約書始の四巻に誰の一代記を記載するや

- 六、第五卷の何につきてなるや
- 七、新約書に幾何の書積あるや
- 八、順序に其名を擧ぐべし
- 九、新約全書最終の書の何あるや
- 十、エルサレム、ナイン、カペナオム、ベツレヘム、ナザレ、スガルのパレスチンの何の部にあるや

第四 日課物語

前章よて學びし比喩のイエスエルサレム最終旅行中語り玉ひし奇蹟集の一部分なり此章よ於て其中の二比喩を學ぶ即ち不義ある裁判人此よてイエス正直公正の價値を教ゆ熱心なる祈即パリサイ人と税吏の祈法此よて自尊の心を誠め玉ふ此章にてのまたキリストの嬰兒を祝し玉ひし美のしき話と富める若き宰のイエスに來りて永生を嗣ぐに如何なる事をなすべきを尋ねしが其人財大なりければ憂て去りし話あり

第五 筆答問題

月曜日の課

不義なる裁判人の比喩 路加傳十八章一節より八節

一、イエス此の譬を語りし何故なるや 一節

二、此の裁判人の性質如何 二節四節

三、或る娼婦彼に何を願求めしや 三節

四、裁判人の此の婦をいかに取扱ひしや 四節五節

五、彼の公平の處置を幾何かせしや

六、此の比喩にて教ゆるところの如何 七節

答 此の不義なる裁判人よして婦の願ひて止まざりしにより之に答へし

とせば神は之よりもまさりて其愛を以て之に答へたまふなり

七、斷へず祈り倦まずとは如何なる意味なるや

一節羅十二〇二弗六〇十八西四〇二撒前五〇十七を引合すべし

火曜日の課

パリサイ人と税吏のたとへ 路加傳十八章九より十四節

八、此の譬の誰に語りしなるや 路十八〇九

九、此の譬を語れよ

十、パリサイ人の祈を暗誦せよ 十一、十二節

十一、何故此の祈の悪しきや 羅十二〇三

十二、税吏の祈の如何 十三節

十三、如何なる精神を彼の表すやまた如何よしてあるや
十四、義とせられたりとは如何なる意味なるや 十四節

水曜日と木曜日の課

基督嬰孤を祝す 馬可傳十章十三より十六節馬太傳十九章十三より十五
節路加傳十八章十五より十七節を引合すべし

十五、イエスの許し携れ來りしもの誰なるや 可十〇十三、初路十八〇十五、

十六、其弟子其れにつきいかにせしや 可十〇十三、終

十七、此を見てイエス如何ある思をかせしや 十四節

十八、如何なる美しき言を吐き玉ひしや 路十八〇十六、銘句

十九、イエス何をあし玉ひしや 可十〇十六、

二十、嬰兒の如く神の國を受くることの如何 可十〇十五、

答 嬰兒の如き心とあり愛らしく柔和よ且教へを受け安かる事をいふ也

廿一、此につきイエス既に如何なることを述しや 太十八〇三、四節暗黙

金曜日と土曜日の課

富る若き等 馬可傳十章十七より卅一節 太十九〇十六―三十、路十八〇十八―三十、引合

廿二、途にてイエスに會ふ來りしもの誰なるや彼何を尋ねしや

路十八〇十八、可十〇十七、

廿三、若者の其青年の時より觀察せしことにつき如何あることを曰しや

可十〇十九、二十節

廿四、此の人の如何なる人と考ふるや

廿五、イエス彼をいかに思ひしや 二十一節初

廿六、イエス彼に何をせよと曰玉ひしや 二十一節終

廿七、若者如何にせしや此の何故さるや 二十二節

廿八、天に財をもつとの如何なる意味なるや 二十一節

廿九、イエス弟子よ其時財につき何といひしや廿三節より廿五節まで駱駝の
附言 針の穴の話の非常さる六ヶ敗事の謔ならん

三十、天國よ入るに妨ぐるもの財を只所有することなるやまたの夫れを我

儘に費用するの性なるや如何二十四節終 路十二〇十九、二十、引合

卅一、凡て所有物を棄てイエスよ従ふものに如何ある約束をなせしや廿九卅節

卅二、凡てを棄てキリストよ服ふとの如何なることなるや

第三十二章 エルサレムよ近く、エリユよての奇跡

馬太傳二十章一より三十四節馬可傳十章三十二より五十二節路加傳十
八章三十一より四十三節

紀元三十年

銘句、蓋人の子の來るも人を役ふ爲にわらず反て人に役われ且おほくの
人に代りその命を予て贖とならん爲あり 可十〇四十五、

馬可傳十章三十二節より四十五節まで朗讀すべし

第一 日課

日曜日 午後 以弗書二章一節より十節まで
恩めぐみよよりての救すくひ

月曜日 馬太傳二十章一節より十六節まで
葡萄園ぶどうの園に工夫くわふの譬たとへ

火曜日 馬可傳十章三十二節より三十四節まで
イエスふた、び其死そのしを豫言よげんしたまふ

水曜日 馬可傳十章三十五節より四十節まで
ヤコブとヨハネの名譽めいよの要求もとめ

木曜日 馬可傳十章四十一節より四十五節まで
務めつとめによりて大おほいなること

金曜日 馬可傳十章四十六節より五十二節まで
替者かへりバルテマイをいやし玉ふ

土曜日 馬太傳二十章二十九節より三十四節まで

エリコエリコよて二人の盲人めしひ

日曜日 午後 の課

第二 復習問題

一 失あやまひたる人々を救きうへんとし玉ふ神かみの聖意みこころよつき如何なる三比喩さんひよを語り玉ひしや

二 此後直このちのちよ語り玉ひし二喩ふたひよの何々なるや 三十章註四十三ヲ見ヨ

三 祈いのちについて如何なる譬たとへを語りしや

四 自尊じそんすることよつきての如何なる譬たとへを語りしや

五 イエスの旅行たびし玉ふところのヨルダン河ヨルダンの川の何の邊へんなるや其方角そのはたぎの如何

六 彼の許もとに携つれ來りしもの誰たれなるや又また何故なにゆゑなるか

七 彼等かれらにつき如何なることをいひしや而しかして何をなし玉ひしや

八 永生えいせいを嗣事ついでごとよつき尋ねしもの誰たれなるや

- 九、イエス彼は何といひしや彼何と答へしや
- 十、後イエス財よつき如何あることを述べしや其意味の如何
- 十一、凡を棄て、服ふものにかなる約束をさせしや
- 十二、此の章題の如何
- 十三、其銘句を暗誦すべし

第三 聖書練習問題

- 一、生徒一人をして新約書六巻を指さしめ他生之を見出し且其畧字を記せしむべし
- 二、二人をして舊約書詩篇の前諸巻の中六巻を指さしめ他之を見出し且畧字を記せしむべし
- 三、詩篇の後の諸巻の中六巻を指しめ前と同くすべし
- 四、日曜日午後に讀むべきとせるの何書なるや
- 五、其書の前ある四巻の何なるや

- 六、其に次て八巻の何々あるや
- 七、此の十三巻の何と名くるや又た誰が書せし者なるや
- 八、パリサイ人と税吏のたとへの何書の何章にあるや
- 九、同章の他よ比喻あるや
- 十、約翰傳三章十六節路加傳十五章七節羅馬書五章一八節以弗所書二章八節を暗誦すべし

第四 日課物語

イエス其弟子に凡てを棄て従ふべきことを告げし後葡萄島に於ての工夫の譬を語り玉ふ此の譬の我曹が爲すところの善き働よらす只神の恩慈よりて天よりの報を得ることを教ふ此後直にイエスの苦をうけかつ死すべきことを預め語り玉ふこれ第三度目あり是時ヤコブとヨハ子の二人イエスの語りし言を誤解して以てイエスの建て玉ふ王國にて高位を獲んことを希へり是に於てイエス語りけるの貴位を望むものは僕の位置にかゝる、ことを

弟子達よ告ぐイエス其件とエリユよ至り此にて途傍にて願ひ求めしものなる盲人バルテマイを醫し玉ひぬ

第五 筆答問題

月曜日の課

葡萄園に働く者の譬 馬太傳二十章一より十六節

一、此譬の如何なる他の關係を以て語りしや 太十九〇十六―三十、

二、如何なる尋に對しての答の一部となり居るや 太十九〇二十七、

三、此の尋ねに對して既に答へ玉ふところの如何 太十九〇二十八―三十、

四、此園には幾種の工人來りしやまた其來りし時刻の差の如何 一節より七節まで

五、一日の終りに彼等の何を受しや 八節より十節まで

六、此につき不平を鳴らせしもの誰あるや何故なるか 十二、十三節引比へよ

七、主人何といひしや 十三節より十五節まで

八、此の譬の神の吾人よ對するに如何なることを教ふるか

答 吾人永生を得るには其働の多少よのよらず只神を愛するの大小によりてなり

火曜日の課

イエス其死と復生につき預言なし玉ふの第三次 馬可傳十章卅二より卅

四節馬太傳二十章十七より十九節路加傳十八章三十一より三十四節を

引合

九、イエスエルサレムエルサレムにむかひ向行き玉ふとき弟子達如何いかに思おもひしや又何故なにゆゑなるや

七十二

三十二節初

十、イエスの身みに來きたらんとすることを誰たれにのみ語りしや是こゝは何故なにゆゑあるや

三十二節終

十一、彼等かれらは告つげし如何いかにあることなるや 三十三、三十四節

十二、此これと同じおなじきことを初はじめ明あきらかに告つげ玉ひし誰たれなるや又た何時いつなりしや

可八〇二十七—三十二

十三、第二次にどに語かたりたまひし何時いつなるやまた如何いかにに語かたりしや 可九〇三十一—三十二

十四、何故なにゆゑ弟子でしのイエスの言ことばを悟さとらざるや 路十八〇三十四

水曜日と木曜日の課

ヤコブとヨハチの名譽めいよ心を誠まことめ玉ふ 馬可傳十章三十五より四十五節馬

太傳二十章二十より二十節引合すべし

十五、ヤコブとヨハチイエスイエスは何なにを求もとめしや 三十五より三十七節まで

十六、彼等かれらの求もとめし如何いかになる思おもひなるや彼等かれらの如何いかになる種たぐひ類るいの榮は譽いよを求もとめん

とせしや 三十七節

附言 弟子等でしのイエスが現世このよにて美うつくしき王國おうこくを建たて玉ふこと、思おもへり由よして

ヨハチヤコブの其重おもなる宰相つうさの位くらゐに昇のぼらんと思おもひしあり

十七、イエス其そのに答こたへて何なんと尋たづねしや 可十〇三十八

十八、杯はらいをたばブテスマとの如何いかになる意味いみなるや 太二十六〇三十九路十二〇五十

附言 杯さちをたたババテテスマスマとのイエスが後直のちたに受うけ玉たまふ苦くるみを指さして用もちひし
語ことばなり

十九、イエスマまたた如何いなる返答こたへをなせしや 可十〇三十九、四十、

二十、此語このことばの眞まことなるを如何いして証あかしするや 使十二〇一、二、一〇九、

廿一、此この求もとめをなすをき、他たの弟子達てしだちの如何いなる感あはれをもちしや 可十〇四十一、

廿二、誠まことに大おほきらんことを望のぞむものよ、如何いなることをなすへきを其弟子そのてしよ
語ことばりしや 四十三、四十四節

廿三、其如何そのいなる手本てほんをイエスの自ら表あらはし玉たまひしや 四十五節、路約十三〇二一、二十七、

金曜日と土曜日の課

エリコにてイエス盲人めしひを醫いし玉たまふ 可十〇四十六一、五十二、太二十〇二十九一、三十四

路十八〇三十五一、四十三引合

廿四、イエス最後さいごの旅行たびの途ち中何市ちゅうあにまちに來きたりしや 四十六節初

エルサレムよりの距離へたの幾何いくげなるや

廿五、彼かれは從したがひしもの誰たれなるや(四十六節終)彼等かれらの何處どこに行いきしや

約十一〇五十五、

廿六、途ちの傍そばに坐ませしもの誰たれあるか彼何かれなにと呼よはりしや

可十〇四十六終、四十七、

廿七人々盲人をいかにせしや 四十八節

廿八、イエス彼をいかにせしや 四十九より五十二節初まで

廿九醫されしものいかにせしや 五十二節終り路十八〇四十三を引合すべし

三十之と同じき奇跡を前に行ひしや其奇跡と此の度の奇跡の異なるところ
の如何 太九〇二十七―三十一可八〇二十二―二十六約九〇一―七、

第三十三章 最後の旅行の終りベタニヤあての筵席

路加傳十九章一節より二十八節まで約翰傳十二章一節より十一節まで

馬太傳二十六章六節より十三節まで馬可傳十四章三節より九節まで

銘句 貧者の常に汝等と偕にあれば汝等心よ隨せて彼等を濟くる事を得
べし我の常に汝等と偕にあらず 可十四〇七、

約翰傳十二章一節より十一節まで朗讀すべし

第一 日課

日曜日 午後 路加傳十九章一節より十節まで

イエスとザアカイ

月曜日 路加傳十九章十一節より二十八節まで

金の比喩

火曜日 馬太傳二十五章十四節より三十節まで

銀の比喩

水曜日 約翰傳十二章一節より八節まで

ベタニヤにての筵席

木曜日 馬太傳二十六章六節より十三節まで

イエスよ膏を抹りし第二次

金曜日 路加傳七章三十六節より五十節まで

イエスに膏抹りし第一

土曜日 約翰傳十二章九節より十一節まで

イエスに抗敵す (約十一〇四十七一五十三節合)

月曜日 午後の課

第二 復習問題

- 一、今學つゝあるの幾篇なるや
- 二、如何なる事蹟ありしや
- 三、如何なる比喩ありしや
- 四、イエス其死につき第三次の預言の誰に語りしや
- 五、此の事よつぎ以前に語りしは何時ありしや
- 六、イエスよ要求せしもの誰なりしや其要求の何なりしや
- 七、イエス彼等に何と答へしや
- 八、神の國にて如何なる人が大なる者なりと曰玉ひしや

九、エリコにていやせしもの誰あるや如何にしていやし玉ひしや

十、此の章題の如何

十一、銘句を暗誦すべし

第三 聖書練習問題

事蹟の順序の約翰傳第一章より十一章中にあり能く研究すべし

一、キリストを道と呼びし約傳何章あるや

二、五人の弟子を得しことの何處に記しあるや

三、第一の奇跡並にエルサレムにて傳道の初まりよ付てのどの何處よあるや

四、第三章に如何なること記しあるや

五、第四章よ如何

六、第五章にて如何

七、第四章にある事蹟より五章に至る事蹟までの殆ど幾ヶ月間なるや

(第七章第十一章並に第三十章註四十二を比較せよ)

八、當時の事蹟の記載しあるの何々の三書あるや

九、其事蹟を述よ

十、第六章の如何ある事を記しあるや

十一、第五章より第六章に至るまでの月日の如何

(第十一章並ニ第二十章を比較せよ)

十二、當時の事蹟の概して何書に記するや

十三、事蹟中の一二を擧よ

第七章の如何あることを記すや

十五、第六章ある事蹟より七章に至る迄の事蹟までの殆ど幾ヶ月間あるや

第二十、第二十一章と第二十六章を比べよ

十六、他の福音書中に記する間の事蹟を述べよ

十七、第八章に記するところ如何

十九、第十章の如何

二十、第十一章の如何

第四 物語

當時イエスのエルダシ河を渡りてふた、びニダヤ入り玉ふエリユ入り玉ふとき多の人々彼の許にあつまる人々の中に税吏あるザアカイと云る人あり此人身量ひくけれバイエスを見んとて桑樹を升れりイエス之を見て甚だ喜び彼の家に至り玉ふ彼大に喜び迎ひたり是の時イエス金の比喩を語る之に由りて神に事ふる忠義を尽すべきを教ふエリユより嶮なる道路を行みベタニヤに行き其處にて癩病シモンの家筵席を備へたり復生されしヲザロ其姉妹マリヤマルタと偕ありきマリヤは喜と彼を愛するの餘り蠟石の器物に價たかき香膏を盛りてイエスの食する所に携來りて搦ぎたり

第五 筆答問題

イエスとザアカイ 路十九〇一十、

一、ザアカイの如何なる人ぞや 二節

附言 税吏の属々其定規より多くの金を人々より取る故に大よ人々より嫌
のれたり

二、イエスエリユを過ぎんとせし時彼如何よせしや又た何故なるや 三四節

三、イエス彼よ何と曰しや 五節

四、イエスの言をきし時サアカイの如何ある思をもちしや

五人々如何なる思をさせしや此は何故あるや 十節路十五〇一二引合

六、サアカイ何をなさんと約束せしや 八節

七、其家よ至りて如何なることを語りしや又た何故なるや 九節

八、アブラハムの眞の子との何あるか 加三〇七

九、イエスの何のためよ來りしと告げしや 十節

月曜日と火曜日の課

金の比喩 路十九〇十一―二十八、

十、イエス此の比喩を語りし何故なるや 十一節

十一、比喩を述よ十二より二十七節まで

附言 イエス爰に自らを指して貴者みづから領地を受けんために行きしに
譬ふ此の譬の當時アケラオ父へロデの後を嗣がんためローマに行き

しを以て人々よ悟り安からしめんためよ如此語りしならん
十二往く時また歸りしときとの如何なる意味なるか

答 イエスの死と昇天並に現世の終に來ときをいふなり

十三僕に金を與へるとの如何なる意なるや

答 神よ事ふるの機會をいふ

十四初の二人の如何ある報賞をうけしやまた何故にうけしや

十五節より十九節まで

十五三人目の者の斷の眞實よ其意より出でし理由なるやまたの偽りて云ふなるや

十六眞の心よりイエスに事へんとするもの如何なる主人となり玉ふや

六十一〇二十八―三十、

十七此の譬のキリストの去り玉ひし後其弟子達に如何なる教訓とあるや

水、木、金曜日の課

ベツニヤよての筵席約翰傳十二章一節より八節 (六廿六〇六一三可十四〇三―九)

十八、ベツニヤの何處あるや何時其處に至り玉ひしや 一節の始め

附言 イエスは多分金曜日の午後着し玉ひ而してユダヤ人の安息日なる土

曜日を過し玉ひしならん

十九其處よ誰の家に於てイエスの爲め如何あることありしや二節

(可十四〇三初を引合せよ)

二十、マリヤ如何にせしや三節 可十四〇三終

廿一、マリヤの行爲に逆らひしもの誰なるや此の何故なるか四、五節

(太二十六〇八、九を引合すべし)

附言 ナルタの價高き膏にして一斤の價凡そ我が五十圓斗りも當る

廿二、ユダの此の言をいひし眞實如何ある理由ありしや 六節

廿三、イエス、マリヤの行爲を如何に賞し玉ひしや 太二十六〇十一、十三

廿四、イエス貧者と自らを比較して何といひしや 可十四〇七銘句

廿五、何時何處よてイエスの此の以前膏を抹られし事あるや 路七〇三十六、五十

土曜日の課

イエスとラザロに企をあす 約翰傳十二章九節より十一節、十一章五十五

節より五十七節

廿六、多の人々イエスの許に來りし何故なるや 九節

廿七、祭司等の何故ラザロをもイエスと同じく殺さんと企てしや 十、十一節

廿八、節筵に來りし人々相互に何と曰しや 約十一〇五十五、五十六、

廿九、祭司の長とパリサイ人等の如何ある命を出せしや 約十一〇五十七、

第三十四章 イエスの構廬の節にエルサレムにいでしよりニヤにての筵席までの復習

銘句 我來るの羊をして命を得かつ豊ならしめんためなり 約十〇七、

第一 日課

爰に記する聖書の日課の此の期中より起りし重なる事蹟を記すなり

日曜日 午後 約翰傳七章三十七節より五十二節まで

イエス 構廬の節に居る

月曜日 路加傳十章二十五節より三十七節まで

善サマリヤ人の比喩

火曜日 約翰傳十章一節より十八節まで

イエスの善牧者

水曜日 路加傳十四章一節より二十四節まで

パリサイ人と食事の時の教

木曜日 路加傳十五章十一節より三十二節まで

蕩子の比喩

金曜日 馬可傳十章十七節より三十四節まで

富める若き宰

土曜日 路加傳十九章一節より二十八節まで

イエスエリコに入る

第二 銘句答案

爰に記するの各章に一づつ、の問答なり級中銘句をよく記憶するものあらば問に應じて暗誦せしむべしまた此に記する答案を朗讀せしむるもよし

第廿六教師 構廬の節の時の燈火は比らへてイエス自らを指して何と曰玉ひしや

生徒 イエス又人々に語りて曰ける我の世の光なり我に従ふもの暗中进行す生の光を得るなり 約八〇十二

第廿七救主として如何なるよきたとへを用ひ玉ひしや

我の善牧者にて己の羊を識るまた己の羊は識らる父われを識る如く我も父を識れ羊のために命を捐ん 約十の十四、十五

第廿八其兄弟の死によりマルタを慰め玉ふとき如何なる驚く可き事を曰玉

ひしや

イエス彼に曰けるハ我ハ復生ナリ生命ナリ我を信するものハ死ぬるとも生べし凡て生て我を信するものハ永遠も死ることなし 約十一〇廿五、廿六節
第廿九、旅行の途中にて救れんために熱心の必要につき如何なることを語りしや

イエス教つ、各城各郷を過エルサレムに向て旅行し或人曰けるハ主よ救へる、ものハ少なきかイエス彼等に曰けるハ窄門よ入ために力を盡せ我なんぢらよ告ん入らんことを求て能ざるものおほし 路十三〇三十二―三十四、
第三十、一人の罪を悔改むるもの、天に於ける感念の如何ありと告げしや
我汝等に告げん此のごとく一人の罪ある人悔改めなば神の使の前に喜びあるべし

第卅一、嬰兒につき如何なる美のしき言を語りしやまた神の國に入らんとするものは如何なる心をもつべしと告げしや

イエス嬰兒をよび弟子に曰けるは嬰兒を我に來らせよ彼等を禁むる勿れ神の國に居るものハ是の如きものなり誠よ汝等よ告ん凡そ嬰兒の如くは神の國を受けざるものハ之に入ることを得ざるなり 路十八〇十六十七、

第卅二、眞正の大なるものにつき如何に説示せしや

汝等のうち大ならんと欲ふものハ汝等よ役る、者とならんまた汝等の中首たらんと欲ふものハ凡の人の僕とならん蓋人の子の來るも人を役ふためよあらず反て人よ役れ且多の人に代りその命を予て贖とならん爲なり 可十〇四十三―四十五、

第卅三、ベタニヤのマリヤイエスに價高き膏を注ぎし時よなせし献身的の行

よつき如何に曰しや
イエス曰けるハ彼よ係る勿れ何ぞ此婦を擾すや我に善事を行へる也貧者の常に汝等と偕にあれば汝等心よ隨せて彼等を濟くる事を得べし我の常よ汝等と偕に在るこの婦の力を盡して作り蓋あらかじめ我を葬る爲わが

身に膏を沃しかり我まことと汝等よ告ん天の下いづくよても此福音を宣傳へらるゝ處に於て此篇の行し事も亦その記念のためよ言傳へらるべし

可十四〇六一九、

第三 第八篇の問題

最終の近づき大なる働の期ユダヤペリヤにての大危険
問題の側の空處に答をかくべし其他の口答あり毎日の分をさすべし答は短くすべし

一、十字架に釘られ玉ふ六ヶ月前エルサレムよ行きし何の祝節の後なりしや 約七〇一―二十五、

二、此時イエス自らにつき外は如何なることを語りしや 約七〇三十七、八〇十二、五十八、

三、祭司の長バリサイ人達イエスをいかにせんと企てしや其企てし處の如何よなりしや 約七〇三十二、四十五、四十六、

四、此時イエス自らにつき外は如何なることを語りしや 約七〇三十七、八〇十二、五十八、

五、ユダヤ人始めてイエスを如何せんとせしや

六、二ヶ月後何節ありしや 約十〇二十二、

七、此の三祝節の間にイエスの語りし比喻の何なるや 路十〇二十五―三十七、

八、此の節に於て如何ある奇跡を行したるや 約九〇一―七、

九、自らを指して何といひしや 約十〇一―十八、

十、ユダヤ人二度目に如何なる事をせんとせしや 約十〇三十一、

十一、逃れし後何處よ行しや 約十〇三十九、四十、

十二、何の目的ありてエルサレムの傍に歸りしや 約十一〇一―四十四、

十三、此の奇跡によりて祭司の長等何を決せしや 約十一〇四十五―五十四、

十四、此の後如何なる旅行をなせしや何の地を過ぎしや

十五、安息日毎になしたる二奇跡を擧よ

路十三〇十一―十七

路十四〇一―六

十六、此の旅行中に語り玉ひし十の比喩を擧よ

路十四〇十五―二十四

同十五〇三一―七

同十五〇八一―十

同十五〇十一―三十二

同十六〇一―十三

同十六〇十九―三十一

同十八〇一―八

同十八〇九―十四

太廿〇一―十六

路十九〇十一―二十七

十七、イエスの誰人を祝し玉ひしや 可十〇三三―十六、

十八、若者如何なる尋をイエスになせしや其の返答の如何 可十〇十七、廿二、

十九、三度目誰が如何なることを預言せしや 可十〇三十二―三十四、

二十、イエスの誠め玉ひし二人の弟子の誰あるや又た何故に誠しや三十五、四十、

廿一、エリコの近くにて如何ある奇跡をなせしや可十、四十六、五十二、

廿二、エリコにてイエスたれの家にて客とありしや 路十九、〇一、七、

廿三、ベタニヤにてイエスに如何ある事を誰がみせしや 約十二、〇一、八、

廿四、此期中イエスの行し處を地圖にて示すべし且つ其順序と何故行しかを

述よ

廿五、此の篇中にて學びし中如何ある事が最も大切かりしと考ふるや

廿六、此の期の終に於けるイエスの形様と三年前、六章を見よと二年前と十一章を見よと一年前と二十、二十一章を見よと比較せよ而して眞より起りし變化

を述よ

第九篇

最後の一週間イエス傳道中最後の過逾節

註四十四、此の篇のイエス生涯の最後の五日間の事と其死並に葬の事を記す其教と事蹟のイエス生涯中に於て最も深意を存する所あり四福音のみな大事蹟を詳記す即ちイエス安息日よのエルサレムよ入り月曜火曜日よの殿よて明かよ人々よ教へかつ毎夜ベタニヤよて過し玉へり水曜日よのベタニヤにて休息し木曜日の夕過逾の節の食をとり其夜中捕られたり金曜日よ裁判を受け十字架よつぎ葬られたり

註四十五、畧題復習

第一篇 降誕並三十年間 第一章 道肉體とされり 第二章 幼時と青年との時代

第二篇 傳道の準備 第三章、洗禮 第四章、試み 第五章、其名の發揚さ

れしこと

第三篇 ヌダヤ傳道の初まり 第六章傳道を初む 第七章、ガリラヤ

よ歸り玉ふ

第四篇 ガリラヤ傳道の初步 第八章、會堂よて説教す 第九章、四人の

撰 第十章、ガリラヤ第一巡回傳道

第五篇 變革時代 第十一章、安息日議論 第十二章、復習

第六篇 重なるガリラヤ傳道 第十三、十四章、使徒の撰び山上の説教

第十五章、パテスマのヨハ子最終の使者 第十六章、ガリラヤ

第二巡回傳道、パリサイ人との激論 第十七章、譬の第一集 第

十八章、湖の東岸よ第一の旅行 第十九章、第三巡回傳道 第二

十章、人望の極まり 第二十一章、人々より見樂らるゝ事

第七篇 旅行 第二十二章、避所を求め玉ひしこと 第二十三章、容貌の變

化 第二十四章、ガリラヤよ告別 第二十五章、復習

第八篇 最後の近づき 第二十六章、擣廬の祝節 第二十七章、殿清の祝

節 第二十八章、ラザロ 第二十九章、最後の旅行を始め玉ふ

第三十章、旅行の比喩 第三十一章、途中よて教ふ 第三十二章

エルサレムに近よる 第三十三章、ベタニヤにての夕食 第三

十四章、復習

第九篇 最後の一週 第三十五章、勝利ある進行 第三十六章、權威の争

第三十七章、詭計の議問 第三十八章、傳道の終

第三十五章 勝を得てエルサレムに入り玉ふ 第二次の殿清

馬太傳二十一章一節より二十二節馬可傳十一章一節より二十五節路加

傳十九章二十九節より四十八節二十一章三十七、三十八節約翰傳十二章

十二節より十九節

紀元三十年第四月二日三日、日曜日、月曜日

銘句

ダビデの裔ホザナよ主の名に由て来るものハ幸ありいと高きこと
ろにホザナよ 太二十一〇九

路加傳十九章二十九節より四十八節までを朗讀すべし

第一 日課

日曜日 午後 馬太傳二十一章一節より十一節まで
勝利ある進行

月曜日 約翰傳十二章十二節より十九節まで

エルサレムよりの歡迎

火曜日 路加傳十九章三十七節より四十四節まで

イエスエルサレムに向て歎き玉ふ

水曜日 馬可傳十一章十一節より十四章二十節より二十五節まで
果實なき無花果樹

木曜日 馬太傳二十一章十二節より十七節まで

第二次の殿清をさし玉ふ

金曜日 約翰傳二章十三節より二十二節まで

第一次の殿清をなし玉ふこと

土曜日 撒加利亞書九章九節より十七節まで

メシヤの勝利あるの預言

日曜日午後の課

第二 復習問題

一、キリスト傳の前の篇につきての間を教師より出すべし 註四十五を見よ

二、此の章の幾篇なるや

三、此の期の如何程なるや 註四十四

四、此の時イエスの何旅行を終へ玉ひしときあるや

五、此の旅行よエリコよて如何なることありしや

六、其處にて如何なる響を語しや

- 七、ベタニヤよつさしの何時なりしや
- 八、其處にて誰がイエスよ如何あることをせしや
- 九、此れよ特別反對せしもの誰なりしや並よ其理由を述よ
- 十、此の章題の如何
- 十一、其銘句を暗誦せよ

第三 聖書練習問題

- 四福音の中の一書にのみ示せる事蹟よ付てなり
- 註四十六、左に記する事蹟の何處に記しあるやを述べかつそれらよつき重なる事を簡易に述べし
- 一、天使と羊牧者の話
- 二、東方よりの學者の話
- 三、イエス幼稚の時殿よてありし事
- 四、イエスのキリストとして世に知られ玉ふこと

五、イエスの第一傳道

- 六、ニコデモとの問答
 - 七、井の傍にて婦と語る
 - 八、ナザレにて拒絶されし第一
 - 九、魚の奇蹟第一
 - 十、ベツサイダの池にて手なへたる人をいやす
 - 十一、ナインの寡婦の子を復生らす
 - 十二、イエスの足よ膏を注ぐ第一
 - 十三、生命のパンの説教
- 此の傳道の第二年の終よありしことなり

第四 日課物課

イエスベタニヤにて安息日を過し玉ふ(我が土曜日なり)次日イエス其弟子二人に命之ベタニヤの近邊あるベツパケと稱する邑より驢馬の子を携來らし

め夫れに乗りて勝利を得てエルサレムに入り玉ふ時に多の弟子達之に従ひ人々大なる喜を以て之を迎たり此の此の時こそ王位につき玉ふと信じたればなり彼等樹の枝を路に布きまた其上衣をも布けり而して大聲に讃め日けるのダビデの裔ホサナよ此の人々エルサレムにあつまれる一隊に逢ひとも其聲を合せ彼等の王なるイエスを聖城よむかひ入れたり其翌日第二次の殿清め即ち賣買するもの兎銀者を逐出し再びベタニヤに歸り玉ふ

第五 筆答問題

勝利の進行 馬太傳二十一章一節より十一節

(可十一〇一―十、路十九〇二十九―三十六を引合せよ)

一、何處よりイエスのエルサレムに入り玉ひしや 約十二〇一、

註四十七、此日の一週の始の日にて我が日曜日(即ち我が土曜)を休息となせり
よニダヤの日曜日(即ち我が土曜)を休息となせり

二、何處を過ぎ何山を踰へ玉ひしや 太二十〇一、

三、二人の弟子に何をせよと命せしや 二三節

四、イエスの命せしことをあすに差支ありしや 六、七節路十九〇三十三―三十五、

五、何故イエスは驢馬の子にのりしや

答 王たるのしるしなり 列上一〇三十三、史五〇十、

六、彼と偕よ來りし人々如何あることをせしや 太二十一〇八可十一〇八、

七、彼等何と呼りしや 太二十一〇九、路句

八、エルサレムに居し人々何を尋ねしや又た何と答へしや 太二十一〇十、十一、

月曜日と火曜日の課

勝利ある進行及び他の機會 約翰傳十二章十二より十九節路加傳十九章三十七より四十四節

九人々のイエスのエルサレムに来るをき、如何なる歡迎をなせしや 約十二〇十二十三

十如何なる舊約書の預言が成就せしや十四、十五節(亞九〇九引合)

十一何故彼等の特別イエスに見へんため来りしや 約十二〇十七、十八、

十二、エルサレムのパリサイ人達之につき如何なる思をもちしや 十九節

十三、人々の中よてパリサイの或人イエス如何あることを云しやイエス彼等は何と答へしや 路十九〇三十九、四十、

十四、イエスエルサレムを見て如何なる感をもち玉ひしや 四十一節

十五、此の市の如何にならんといひ玉ひしや此の何故あるや 四十二―四十四節

註四十八、紀元七十年ローマ帝タイタス八萬の兵を率ひエルサレムを圍めり數月間攻撃せしも其容易降らざるを以て市のまわりに城壁を築けり因て市に食を運ぶものおきよ至り遂に大饑餓起る是に於てユダヤ人大ひよ力を失へローマ人遂に市を取るに至れり此の戦よて數萬のユダヤ人戦死せり

水曜日 の課

果實なき無花果樹 馬可傳十一章十一より十四節二十節より廿五節馬太傳二十一章十八節より二十二節を引合へし

十六、イエス殿に入りし其後何をなし玉ひしや夜何處に歸り玉ひしや

可十一〇十一、

十七、市に歸り玉ふとき即ち月曜日の朝何を見玉ひしやイエス其より何を求め玉ひしや 可十一〇十二、十三、

附言 無花果樹の通例葉の生ずる前果を結ぶ故に此の樹に葉茂りをればイ

エスマた其より果實を求め給ひしことの當然なりといふべし

十八、イエス其樹に何といひしやまた如何にかりしや

可十一〇十四、二十、太二十一〇十九引合すべし

十九、此の如何なる比喻を考しむるや 路十三〇六、九、

木曜と金曜日との課

殿を清むること 馬太傳二十一章十二より十七節

可十一〇十五、十九、路十九〇四十五、四十八、二十一〇三十七、三十八、約二〇十三、二十二

二十、其朝エルサレムに達するや否やイエス如何なることをあしかつ曰ひ玉ひしや 太二十一〇二十三、

廿一、此の前に如此殿を清め玉ひしことの何時なりしや 約二〇十三、二十二、

廿二、此の後如何ある奇蹟を行しや 太二十一〇十四、

廿三、殿に迎ひしものの誰なるや祭司の長學者達如何に思ひしや

太二十一〇十五、十六、

廿四、夜を過さんため何處へ行しや 太二十一〇十七、

土曜日の課

メシヤの勝利あるの預言 亞書九章九節より十七節

廿五、預言者の誰を喜びむかへるといひしやその何故あるや 九節

廿六、此の王の領地の如何にひろきや 十節終詩七十二〇八

第三十六章 殿中の口論、權威の争 馬太傳二十一章二十三節よ

り二十二章十四節馬可傳十一章二十七節より十二章十二節路加傳二十

章一節より十九節

紀元三十年第四月四日火曜日

銘句 是故に我かんにちらに告ん神の國を汝等より奪ひその果を結ぶ民に

予へらるべし 太二十一〇四十三

馬太傳二十一章三十三節より四十六節まで朗讀すべし

第一 日課

日曜日 午後 馬太傳二十一章二十三節より二十七節まで

イエスの權威を争ふ

月曜日 馬太傳二十一章二十八節より三十二節まで

二人の子の比喩

火曜日 馬太傳二十一章三十三節より四十一節まで

悪農夫のたとへ

水曜日 馬太傳二十一章四十二節より四十六節まで

比喩の解説

木曜日 イサヤ書五章一節より七節まで

エホバの葡萄園

金曜日 馬太傳二十二章一節より十四節まで

皇子結婚のたとへ

土曜日 路加傳十四章十五節より二十四節まで

大筵のたとへ

日曜日午後の課

第二 復習問題

- 一、イエスの勝利を得てエルサレムに進行し時の何處より來り玉ひしや
- 二、何に乗りしやまた如何にして夫れを得玉ひしや
- 三、如何ある人々彼に従ひしや彼等又た如何なることをなせしや
- 四、イエス始めて市入り見玉ひしとき如何にかんじ玉ひしや
- 五、如何なることを預言せしや
- 六、夜の何處にてすこせしや
- 七、無花果樹を如何せしやその何故なりしや
- 八、月曜日殿入りしとき如何なることをせしや
- 九、此の章題の如何

十、其銘句を暗誦すべし

第三 聖書練習問題

- 四福音の中の一書のみを示せる事蹟につきての續き 註四十六を見よ
- 一、七十人を遣す
- 二、イエスを捕へんとせし第一次
- 三、第一次にイエスを石打せんと試みしこと
- 四、善サマリヤ人のたとへ
- 五、生來のめしひを醫す
- 六、善牧者の比喩
- 七、第二次イエスを石打せんとこゝろみしこと
- 八、ラザロの復生
- 九、大なる筵、失ひし羊、失ひたる金、放蕩息子、不正なる操會者、富者とラザロ、不正なる裁判人、パリサイ人と税吏、斤の譬

イエスの傳道の終の日を四部に分つ、第一のイエスの權威につきて反對者の攻撃、第二の難問を出してイエスの説話を亂ださんとせしこと、第三の彼等に答へ玉ひし後災難を預言し玉ふこと、第四イエス其弟子エルサレムの滅亡と世界の終りとよつきて語り玉ふこと此章の第一のみを學ぶなり

祭司の長と學者達のイエスの終の二日に於て爲し玉ひしことにつきて甚だ怒れり由りてイエスを呼び論議せんと決せり火曜日の朝イエス再び殿に行きしとき彼等のイエスに如何なる權威を以て之等の事をあすやとの問をなせりイエス之に對して先づ彼等にバプテスマのヨハ子の事につきて尋ねたれば彼等の之に答ふること能はざりき後三比喻即ち二人の子と惡農夫の譬と王子の結婚のたとへとを語る之よ於てイエスニ「タヤ人の己に惡反對なす事につきさびしく誠玉へり」

權威の争

馬太傳二十一章二十三節より二十七節

可十一〇二十七、三十一、三十八、引合

一、イエス火曜日朝殿に入りしとき如何なる問を誰が尋ねしや 太二十一〇二十三

二、イエス其答として如何あることをたづねしや 太二十一〇二十四、二十五、初

三、何故祭司等は答に狐疑せしや 二十五節終二十六節

四、彼等の何といひしやイエス何と答へしや 二十七節

五、イエスの何故彼等に答ふるを拒みたりしや

答 其故の彼等のヨハ子の權力の神より來りしことを領知するを好まざる故たとへイエスの神聖なる權力をもち玉ふことを説き玉ふともましくことを好まざる事を證するが故なり

二人の子のたとへ 馬太傳二十一章二十八節より三十二節

六、此の譬を話の如くにして語るべし 二十八―三十節

七、初の子の他のものよりも如何あるところがよきや又如何にせしならば最もよきや

八、神の國に入らんとするもの何が必要あるや 太七〇二十一、暗誦

火、水、木曜日 月曜日の課

悪農夫のたとへ 馬太傳二十一章三十三節より四十六節

(可十二〇一―十二、路二十〇九―十九、引合すべし) 賽五〇一―七

九、譬を話の如くよして語るべし 太二十一〇三十三―三十九、

附言 籬の歌類の入り来るをふせぐ酒搾の葡萄を壓す槽にして其汁の地の

まわりにをきたる煉瓦の溜よ注入あり塔との番人のをる小屋にして
高き臺の上よ作らる

十、葡萄園との誰をさすやをた主人との誰なるや 賽五〇一―七引合

十一、農夫との誰なるや

答 凡てユダヤ人重に其宣教師をさすなり

十二、神が其葡萄園に遣のせし或る僕のいかにされしや

代下二十四〇二十、二十一、エリミヤ三十七〇十五、以下

十三、其子との如何ある意味なるや

十四、祭司等此の悪農夫をいかにすべしといひしや 太二十一〇四十一、

十五神の國の誰より予へらるべしといひしや 太二十一〇四十三、餘句

百十八

十六、此譬をき、て彼等のいかゞ感せしや而て何をなさんとせしや

太二十一〇四十五、四十六

金曜と土曜との課

皇子の結婚 馬太傳二十二章一節より十四節 路十四〇十五、二十四を引合すべし

十七、此譬を話の如くに語るべし 太二十二〇一、一十四

十八、此と同々譬の何時何處よて語りしことあるや

路十四〇十五、二十四、第二十九章を見よ

十九、王との誰を意味するや初に招かれし人達との誰を意味するや

二十、此客は王の招に對して如何なることをせしや 太二十二〇三、一六

廿一、終に招を受しもの誰を意味するや

答 異邦人あり

廿二、禮服を着ざる人よ對し王の如何なる感をもらしや

附言 總て客たるものは王の婚禮にの必ず上着をつけ出るを例とす若着ざるときにの失禮に當るあり此等の禮服の王より供ふる理なきあり

廿三、禮服とは如何ある意味なるや 裝十一〇十、歌七〇十四、引合

第三十七章 殿中の爭論、詭計の疑問 馬太傳二十二章十五節より

四十六節馬可傳十二章十三節より三十七節路加傳二十章二十節より

四十四節

紀元三十年第四月四日火曜日

汝心を盡し精神を盡し意を盡して主なる汝の神を愛すべしこれ第一にして大なる誠なり第二も亦これに同じ己の如く隣を愛すべし 太二十二〇三十七、三十九

馬可傳十二章二十八節より三十七節まで朗讀すべし

日曜日 午後 馬太傳二十二章十五節より二十二節まで
カイサルに税金

月曜日 馬太傳二十二章二十三節より三十三節まで
魁よつきての疑問

火曜日 馬太傳二十二章三十四節より四十節まで
二 大誠

水曜日 馬可傳十二章二十八節より三十四節まで
考深き祭司

木曜日 申命記六章一節より十五節まで
イスラエルの誠

金曜日 馬太傳二十二章四十一節より四十六節まで
ダビデの裔につきてイエスの疑問

土曜日 詩篇百十篇

メシヤよ付てダビデの預言

日曜日午後の課

第二 復習問題

- 一、此前章に記せし譬の何日よてありしや
- 二、其日イエスに尋問し第一の問の何なるや
- 三、其時の何處に居玉ひしや
- 四、イエス之に答へて如何なる問を出せしや
- 五、其時語り玉ひし三比喩を述よ
- 六、二人の子とは誰を指すや
- 七、悪農夫とユダヤ人との如何あるところ相似たるや
- 八、第三比喩に於てエルサレムよつき如何なる預言を含みをるやまた如何にして遂げられしや
- 九、禮服を着するとの如何なることや

十此の章題の亦よあるや
十一其銘句を暗誦せよ

第三 聖書練習問題

イエスの語りし重なる比喩よつきて

註四十九 此よ記する比喩の各心よ銘しかつ其比喩の語られし事情を
よく心よとひむべし

教師の此につき必要と認むる問を出し尋ぬべし

一馬太傳十三章並馬可傳四章にある八比喩を語るべし

二始の五比喩の誰よ語りしや何處ありしや

三後の三比喩の誰に語りしや何處なりしや

四此の中何の七比喩が馬太傳よ記しあるや馬可傳のみよ記するの何あるや

五此の比喩の中幾何路加傳八章中よあるや

六此時のイエス傳道中の何時頃なりしや

七善カマリヤ人のたとへの何處よあるや

八此の譬の何時誰に語り玉ひしや

九譬の第二集の路加傳の何章に記しあるや

十此等の何篇にて學びしや

第四 日課物語

其權威よつきパリサイ人等のイエスを試んため疑問を出せし事も全く無功となりたるにも係らず彼等のまた之に反對すべき語を設てイエスを誘惑せんとせり是に於て三疑問を出したり各異なる疑問を以てせり第一パリサイ人のローマ帝よ納べき税につき問を起す次に即ち難なしといへるサドカイ人等の死して後の關係につき最も愚なる疑問を出せり終る學者の一人聖誠の中いづれが大ならんとの疑問を出し試みたり然どイエスの凡て此等の疑問に對しいと伶俐に返答し玉ひしのみならず其敵者をして靜まらしめ玉へり

第五 筆答問題

カイザルの税 馬太傳二十二章十五節より二十二節

可十三〇十三一十七、路二十〇一二十一廿六引合せよ

一、誰がイエスにむかひ謀を企てしや何の目的ありてなるや 太二十二〇十五、

二、彼の許に遣はされしもの何人なるや彼等如何ある假託をいひしや十六節
路二十〇二十、

三、彼等の如何あることを尋ねしや 太二十二〇十七、

四、イエス何をなせしやまた彼等に何と答へしや 十九節より二十一節まで

附言 税とのローマ皇帝に納むるところの税金なりイエス若し税を拂ふべ

しといへど即ちローマ人を嫌ふもの同意するものなり若し拂ふべき
かれといひローマに反逆ものとして罪せられ恐らくは捕はるゝな
らんイエス此の両答を避け玉へり

月曜日の課

疑はつきての疑問 馬太傳二十二章二十三節より三十三節

路二十〇二十七一四十四、可十二〇十八一二十七、引合せよ

五、其次に來りしもの何人あるや 太二十二〇二十三、初

六、如何なる問を尋ねしや 二十四節より三十八節まで

七、イエス何と答へ玉ひしや天に於て何人の如きか 二十九、三十節

火、水、木曜日の課

二 大聖誠ふたつのまこと

馬太傳二十二章三十四節より四十節馬可傳十二章二十八節より三十四節 申六〇一―五、引合

八、イエスサドカイ人等をしづめし後學者の一人如何なることを尋ねしや又
九何故なるや 太二十二〇三十四―三十六、

九、イエスの答如何 三十七―三十九節、銘句

十、此の二聖誠の原何人に與られしものなるや 申六〇四、五、利十九〇十八、

十一、律法と預言者との如何ある關係を有するといひ玉ひしや 太二十二〇四十、

十二、以前よ於て特別に必要として此の誠を當てられしや 路十〇二十五、二十七、

十三、此の二誠を守る人の如何なる人なるや神に對するに如何にす可きや

また其伴人に對するよの如何す可きや

十四、世の人みか誠を守らば世の如何にかるや

十五、イエスの答をき、學者の如何なる考をもちしや 可十二〇三十二、三十三、

十六、イエス彼につき何といひしや其意味の如何 可十二〇三十四、初

金曜日と土曜日との課

ダビデの裔につきてのイエスの疑問 馬太傳二十二章四十一節より四十

六節馬可傳十二章三十五節より三十七節路加傳二十章四十一節より四

十四節引合

十七、如何なる尋をイエスのパリサイ人よ問ひしや 太二十二〇四十一、四十二、初

十八、彼等の答の如何 太二十二〇四十二終

十九、如何なる句をイエスの讀み玉ひしや夫れにつきて如何なることを尋ねしや 四十三―四十五節詩百十〇一引合

附言 此の詩篇にてダビデのメシヤ即ち其聖なる主の來るべきことをいへり故にメシヤのダビデの裔ありまた神の子ありユダヤ人の此の詩篇ハメシヤにつきいへるなるを知り居れり 使二〇三十四來一〇十三引合
二十、此の答のキリストの敵をして如何なる結果あらしめしか 太二十二〇四十六

廿一、普通の人への如何なる結果ありしや 可十二〇三十七終

第三十八章 傳道の終り殿中にて最後の出來事

馬太傳二十三章一節より三十九節馬可傳十二章三十八節より四十四節

路加傳二十章四十五節より二十一章四節約翰傳十二章二十節より五十一節

紀元三十年第四月四日火曜日

我もし地より擧られあハ萬民を引て我に就せん 約十二〇三十二

約翰傳十二章二十節より三十六節まで朗讀すべし

第一 日課

日曜日 午後 馬太傳二十三章一節より十二節まで

パリサイ人と學者達とにつきての誠

月曜日 馬太傳二十三章十三節より二十四節まで

パリサイ人と學者達との災を預言す

火曜日 馬太傳二十三章二十五節より三十六節まで

パリサイ人と學者輩の災を預言す

水曜日 馬太傳二十三章三十七節より三十九節まで

エルサレムよつきての愁歎 路十三〇三十四―三十五引合

木曜日 馬可傳十二章四十一節より四十四節まで

寡婦のレファタニツを納むる事 路二十一〇一―四引合

金曜日 約翰傳十二章二十節より三十六節まで

ギリシヤ人の面會

土曜日 約翰傳十二章三十七節より五十節まで

ヨハチイエスの傳道を一束す

日曜日午後の課

第二 復習問題

一、前章に記せし語は終の一週の何曜日なりしや

二、其日イエス殿にて何をあし玉ひしや

三、其處にて前日如何なることをあし玉ひしや

四、同週間の初日は如何なることが起りしや

五、火曜日の朝イエス殿に入り玉ふとき如何なることを求めしや

六、其答としてイエスの如何なる三譬を語りしや

七、イエスよ尋ねし第一の問の何なるや

八、次に尋ねしもの誰あるや其理由を述べよ

九、第三の疑問の如何イエス之に何と答へ玉ひしや

十、イエスの如何なる疑問を出して此の争論を止めしや

十一、これよつきて其敵者の如何なる感を起せしや又た普通の人民の如何に

思へしや

十二、此の章題の如何

十三、其銘句を暗誦せよ

第三 聖書練習問題

イエスの重なる比喻のついき 註四十九を見よ

一、大 筵の壁の何處にて語り玉ひしや之よ似たる他の譬如何

- 一、恩惠の三譬の何々なるや又た何書にあるや
- 二、路加傳十六章にある二比喻を擧よ
- 三、熱心なる祈よつき教ゆるは何の比喻なるや
- 四、自尊を誠むるの何あるや
- 五、葡萄園の工夫のたとへ何にあるや
- 六、七斤のたとへ何にあるや
- 七、馬太傳二十一章ある二喩を述よ
- 八、其次の章に如何ある比喻あるや
- 九、イエスの語り玉ひし終の二比喻の何々なるや 太二十五〇
- 十、此の中何れが一福音書のみ記しあるや (第卅五、卅六章の聖書練習問題を見よ)

第四 日課物語

イエス其敵者を静め玉ひし後パリサイ人等來るべき災を預言し玉ふと同時にイエスは逆ひ悪き結果としてエルサレムの滅亡よつきて歎き玉ふ殿を去

らんとせし時一人の貧しき婦人二枚を賽錢箱に投げんとせしを見忽ち公正なる施につきよき教を述玉ふ或るギリシヤ人イエスを見て進み來る是に於てイエス其十字架につき死し玉ふことよ由り多くの人々彼の名に入られんことを語り玉ふ人々のため犠牲とかり玉ふ時の近よりたるを思ひ心大ひに愛ひたり然と父よ汝の名の榮を顯せと曰玉ふ即ち天より聲ありてパフテスマを受けて始玉ひし傳教も此に至りて終りぬ

第五 筆答問題

パリサイ人と學者達とにつきての誠 馬太傳二十三章一節より十二節

可十二〇三十八―四十四、路二十〇四十五―四十七、引合すべし

一、イエス其弟子と人々とよ學者とパリサイ人の事につき如何なることを云へ玉ひしや又たその何故なるや 二十三〇―一三、

附言 モーセの位に坐すといふ事なり依てパリサイ

人の權威の諾すべきあり然れども其行爲の模範とすべからず

二、彼等の見られんため如何なることをなすを好みしや 五―七節

附言 佩經との四ヶ條の文句を記せるもの、入りたる少なき皮の箱あり、其

に記するの出十二〇三一十一十七、申六〇四―九十一〇十三―二

十一なり此の箱の一を額にかけ一を左腕にかけをく即ち申六〇八と

出十三〇十六の命に従ひ居るとなすならん衣の裾の民十五〇三十八

一四十に記せるよれバ青色なり

三、其時イエス聴衆に何を避けよと命せしや 八節より十節まで

四、眞に大なるもの如何なりと曰玉ひしや十一、十二節 太二十〇三十一―三十七引合

月、火、水曜日の課

學者とパリサイ人につきて誠め玉ふ

五、如何なる大惡によりて學者とパリサイ人とを咎め玉ひしや 十三節

六、己の宗旨に引入とするの熱心につきて如何に語り玉ひしや 十五節

附言 改宗者との異邦人のユダヤ人となりしものを云ふ

七、パリサイ人等の小なき儀式に能く氣をつけ眞實肝要ある事は全く氣つけ

ざる事につきて何と曰しや 二十三、二十四節

八、イエス彼等を何より比らへしや 二十七、二十八節

九、彼等を何と名けしや 三十三節

十、彼等につきて語りしことを讀み其如何なる人物なるかを述よ

十三節より三十五節まで

十一、イエスエルサレムにつき何と曰玉ひしやその何故あるや

三十七より三十九節三十七、暗誦すべし

木曜日の課

寡婦のレプタ二つを納ること馬可傳十二章四十一節より四十四節

路二十一〇一―四引合すべし

十二、イエス休息まなため何處も坐し玉ひしや 可十二〇四十一、

附言 殿にての婦の拜所より人々より捧ぐる物品を受くるために十三の眞銅

の箱を供へあり此の箱を賽錢箱と云ふ

十三、其處も座せし時何を見玉ひしや 四十一、四十二節

附言 レプタとの最小銅錢にして殆ど四厘ほどあり

十四、此の捧物よつきイエス何と曰玉ひしや 四十三節

十五、何故富者の捧物よりまさりて多しと曰玉ひしや 四十四節

十六、捧物をして眞の價値あらしむるは何になるや

金曜日の課

ギリシヤ人の面會 約翰傳十二章二十節より三十六節

十七、イエスに見へんとせしもの誰なるや之をイエスも告げし誰あるや

二十節―二十二節

十八、如何なること暫らくしてあらんと言しや其意味の如何二十三節

詩二〇八、賽五十三〇十一引合

附言 此の後イエスの名のユダヤ人のみならず凡ての國民の中にあはれんとするの始めあることを得知すべ也

十九、彼も従はんとする凡ての人またギリシヤ人も如何なる教を予へしや

二十六節暗誦

二十、暫くして十字架の苦を受け玉ふことを思玉ひし時如何なる祈を捧げし

や之も對して如何なる答ありしや 二十七、二十八節

廿一、イエスの死の如何なる結果あらんと曰玉ひしや 三十二節銘句

廿二、イエス人々に最後の意見を何とせられしや 三十五、三十六節始

廿三、其時如何となり玉ひしや 三十六節終

附言 此に至りてイエスの傳道の全く終りたり(約十二〇三十七一五十)ハ

チが其傳道を一束せしものなり

土曜日の課

ヨハチイエスの傳道を一束す 約翰傳十二章三十七節より五十節

廿四、概してイエス傳道の結果の如何 三十七節

廿五、有司等の中よて彼を信せし者の如何せしや 四十二節四十三節

廿六、イエスの何故此の世に來りしと告げしや 四十六、四十七節四十六節暗誦

第九篇 續き

最後の一週間イエス傳道中最終の喩過節

註五十 此篇のイエス生涯の最終の五日間の事と其死並に葬の事を記す

其教と事蹟のイエス生涯中にて最も深意を存する所あり四福音みな

大事蹟を詳記す即ちイエス安息日ヨエルサレム入り月火曜日ハ殿

にて明のに人々も教かつ毎夜ベタニヤにて過し玉へり水曜日ハベタニ

ヤにて休息し木曜日ハ夕喩過節の食をとり其夜中捕られたり金曜日に

詮議を受け十字架に釘られ葬られたり

總て此等の事蹟の十二章中に記す既よ四章の學り他の註五十一に記す

註五十一 略題復習

第一篇 降誕並に三十年間 第一章、道肉體とかれり 第二章、幼時と青年との時代

第二篇 傳道の準備 第三章、洗禮 第四章、試み 第五章、其名の發揚されしこと

第三篇 ヌダヤ傳道の初まり 第六章、傳道を初む 第七章、ガリラヤに歸り玉ふ

第四篇 ガリラヤ傳道の初步 第八章、會堂にて説教す 第九章、四人を撰事 第十章、ガリラヤ第一の巡回傳道

第五篇 變革時代 第十一章、安息日議論 第十二章、復習

第六篇 重なるガリラヤ傳道 第十三、第十四章、使徒をゑらぶ 山上の説教 第十五章、パテスマのヨハ子最後の使者 第十六章、ガ

リラヤ第二巡回傳道 ハリサイ人との激論 第十七章、譬への第一集 第十八章、湖の東岸よ第一の旅行 第十九章、第三巡回傳道 第二十章、人望の極り 第二十一章、人々より見棄らるゝこと

第七篇 微行、第二十二章、避所を求め玉ひしこと 第二十三章、容貌の變化 第二十四章、ガリラヤに告別 第二十五章、復習

第八篇 最終の近づき 第二十六章、構廬の祝節 第二十七章、殿清の祝節 第二十八章、ラザロ 第二十九章、最後の旅行を初め玉ふ 第三十章、旅行の比喩 第三十一章、途中よて教ゆること 第三十二章、エルサレムに近よる 第三十三章、ベツニヤよての夕食

第九篇 最後の一週間 第三十五章、勝利ある進行 第三十六章、權威の争ひ 第三十七章、詭計の議問 第三十八章、傳道の終り 第三

十九、第四十章、弟子等に預言をおし玉ふ 第四十一章、最後の諭
過節 第四十二、第四十三章、最後の教 第四十四章、ゲッセマ、子
第四十五章、詮議並に罪の宣告 第四十六章、十字架よつく葬ら
ること

第三十九章 エルサレムの滅亡とキリストの再び世に來の預言

馬太傳二十四章馬可傳十三章路加傳廿一章五節より三十六節

紀元三十年第四月四日火曜日

銘句、然と汝等もまた預備せよ意ざる時に人の子きたらんとすればあり

太二十四〇四十四

馬可傳十三章一節より十三節まで朗讀すべし

第一 日課

日曜日 午後 馬太傳二十四章一節より十四節まで

偽の光

月曜日 路加傳二十一章十節より十九節まで

迫害の預言

火曜日 馬太傳十章十六節より二十三節まで

迫害につきて心得居る可き預言

水曜日 馬太傳二十四章十五節より二十二節まで

エルサレムの滅亡

木曜日 馬太傳二十四章二十三節より三十一節まで

人の子の再來

金曜日 馬太傳二十四章三十二節より四十二節まで

無花果樹の教

土曜日 馬太傳二十四章四十三節より五十一節まで

忠義よして智僕

日曜日 午後の課

第二 復習問題

- 一、イエス生涯中終り火曜日には、イエス殿にて語り玉ひし三比喩を述べ
- 二、其時尋ねし三疑問を述べ何人によりて尋ねられしや
- 三、學者とパリサイ人等の人に見られたため如何なることとあすと言しや
- 四、彼等ハ如何なる人物なりと曰ひしや
- 五、エルサレムに於て如何なることを曰ひしや
- 六、賽銭箱に投せしとき如何なることありしや
- 七、日暮る時何國人見へんとて來りしや
- 八、凡てイエスに仕へしとすれ如何なることをあす言しと曰ひしや
- 九、イエスの擧ぐることをあつと何と曰ひしや
- 十、イエスを信せし有司等の何故言わらぬ事を怒れしや
- 十一、此の章題の如何
- 十二、其章句を暗誦せよ

第三 聖書練習問題

變革時代までイエスのあせし重なる奇蹟

註五十二 此等の奇蹟の順序并に他の事蹟との關係との深く心よ止むべし此に必要なる問題を教師の尋ねべし

- 一、イエスの第一の奇蹟の何なるや又た何處よてあし玉ひしや 約二〇一―二二
- 二、カナに居りし時カペナオムよて醫し玉ひしもの誰あるや約四〇四十六―五十四
- 三、魚の第一奇蹟は何時なりしやまた何故なし玉ひしや 路五〇一―十一
- 四、カペナオムよて安息日に如何なる奇蹟をあせしや 可一〇二十一―三十四
- 五、第一ガリラヤ巡回傳道中如何なる奇蹟をなせしや(一々委敷述べ)

馬太四〇二十三、二十四、可一〇三十九―四十五

六、カペナオムよて醫されんと望み屋根より降されしもの誰なるや

可二〇一―十二

七、エルサレムよて安息日にあせし第一の奇蹟の何ありしや夫によりて如何

なること起りしや 約五〇一―十八、
八、其後ガリラヤにて安息日に誰を醫せしや是によりてパリサイ人等如何に
思ひしや 可三〇一―六、

第四 日課物語

イエス傳道の最終の日暮イエス人々の彼を信せず惡事のみを行ふことよ
り恐るべき滅亡のエルサレムよ來るべきを思ひいたく心憂てエルサレムを
去り玉ふ去るに臨みて外よ棄られたる石の殿の基礎とあるべきを預言すべ
クニヤに行く途中弟子とともにカンラン山の西麓に至り此に座して後よ來
らんとする恐るべき滅亡よつきて預言し第一に語りし凡てイエスに服ふ
人々の嫌惡れ迫害らるゝと雖も其福音の全世界に播まらんことなり次にエ
ルサレムの滅亡と人々の受べき大なる災害を告げ終りにイエスの大なる榮
光を以て再び天の雲に乗り來るべきを語り玉ふ然れども其日の何時來るべ
きを知るものなし故よ各職務を怠らすかつ其の預備をすべきことを語り玉
へり

第五 筆答問題

月曜日の課

偽の光

馬太傳二十四章一節より十四節 可十三〇一―十三、路二十一〇五―九、引合

一、聖殿を出でし時弟子イエスに何を見よと云ひしや 可十三〇一、

附言 聖殿の外面の石の甚大よして三十二尺の長のものもありしなり

二、此等の石よつき如何なることを預言せしや 太二十四〇二、

三、カンラン山に座せしとき或る弟子如何あることを尋ねしや

太二十四〇三、可十三〇三、引合

四、何人に注意すべしといひしや 太二十四〇四、五、十一節

五、此の苦難の初は於て如何ある前兆ありと云ひしや 太二十四〇六一八、

六、末期の來る前は如何なることをなすべしと云ひしや 太二十四〇十四、

火曜日の課

迫害の預言 路加傳二十一章十節より十九節 太十〇十六―二十三、引合すべし

七、イエスの弟子達の如何にさると云ひしや 路二十一〇十二、十三、可十三〇九、

八、其迫害は對へんことにつき如何なることを云しや 路廿一〇十四、十五、可十三〇十一、

九、其友人よりも如何にさされんと云ひしや 路二十一〇十六、十七、

十、終まで堪忍ぶものよの如何なる約束をなし玉ひしや 可十三〇十三、終、暗誦

水曜日の課

エルサレムの滅亡 馬太傳二十四章十五節より二十二節

可十三〇十四―二十、路二十一〇二十一―二十四、

十一、ユダヤに居る弟子達のエルサレムの滅亡を如何にして知るや路二十一〇二十

附言 エルサレムのローマ帝タイタスの軍よりて圍攻れ遂に亡されしな

り 第三十五章註四十八を見よ

十二、其時の如何にあすべきや 路二十一〇二十一、太二十四五―十八、

十三、多の人々とエルサレムの如何よなるべきことを語りしや

路二十一〇二十四、太二十四〇二十一、

附言 ヌダヤの歴史家ヨセファス曰く大古の人類の災難と此時ユダヤ人が受けしとを比較せば前者遙に輕少なりと

木曜日の課

キリストの再來 馬太傳二十四章三十三節より三十一節

可十三〇二十一―二十七、路二十一〇二十五―二十八、引合

十四、其時にキリストの來るべきよつぎ其弟子達を欺かんとするものなるや 太二十四〇二十三―二十六、

十五、イエスの來る何の如く人々も知らる、といひしや 太二十四〇二十七、

十六、天に如何なる兆あらはるや 太二十四〇二十九、

十七、地よの如何なる兆あらはるや 路二十一〇二十五、二十六、

十八、如何にして人の子の來るや其時如何なることあるや 太二十四〇三十一、三十二、

十九、其時に如何すべしと弟子達に言て勵せしや路廿一〇廿八 太廿四〇三十一、引合

イエスを愛するもの其に就て心煩することあるや

金曜日土曜日の課

預備の命令 馬太傳二十四章三十二節より五十一節

可十三〇二十八―三十七、路二十一〇二十九―三十六、引合

二十、イエスの來り玉ふ其時の何時なりしと云しや 太二十四〇三十六、可十三〇三十二、
廿一、其不意の再來を如何に説明せしや 太二十四〇三十七―三十九、創七〇引合

廿二、弟子達に如何よせよと告げしや 路二十一〇三十四一三十六、太二十四〇四十四、

廿三、キリストの再来につきて預備するとの如何なることなるや

答 忠義よして信仰厚き基督信者の生涯を送ることを云ふ

第四十章 大審判につきての教訓

馬太傳二十五章

紀元三十年第四月四日火曜日夕

銘句、斯て王その右よをる者に云ん吾父よ恵まる、者よ來て創世より以

來なんぢらのためよ備へられたる國を嗣げ 太二十五〇三十四、

馬太傳二十五章三十一節より四十六節まで朗讀すべし

第一 日課

日曜日 午後 馬太傳二十五章一節より十三節まで

十人の童女の比喩

月曜日 馬太傳二十五章十四節より三十節まで

銀錢の比喩

火曜日 路加傳十九章十一節より二十七節まで

金十斤を十人よ與へし比喩

水曜日 馬太傳二十五章三十一節より四十節まで

義人の裁判

木曜日 哥林多前書十三章一節より十三節まで

パウロの愛の教

金曜日 馬太傳二十五章四十一節より四十六節まで

不義なる人の裁判

土曜日 馬太傳十三章二十四節より三十節まで同三十六節より四十三

節まで

稗子の譬

日曜日午後の課

第二 復習問題

- 一、火曜日午後イエスエルサレムを去らんとせし時聖殿の石につき如何なることを語りしや
- 二、弟子と偕に何處に座し玉ひしや
- 三、如何なる二大事を彼等の尋ねしや
- 四、如何にして多人の偽り欺かんと云玉ひしや
- 五、其弟子達の如何にせらるゝや
- 六、攻圍の初まりし時に如何すべしと告げ玉ひしや
- 七、イエスの來り玉ふときよの如何なる兆あるや
- 八、何人がイエスの前集めらるゝや
- 九、イエスの來る日を知るもの誰のみなるや
- 十、其來る日のため如何なることをせよと弟子達に命じ玉ひしや

十一、此の章題の如何

十二、其銘句を暗誦せよ

第三 聖書練習問題

- 重なるガリラヤ傳道と微行との問に於てイエスの行せし奇蹟につきての如何 第三十九章註五十二を見よ
- 一、山上の説教の後なし玉ひし二奇蹟を擧よ 路七〇一―十七
- 二、パリサイ人等イエスのベルセブルに由り鬼を逐出すなりと曰しときイエス如何なる人を醫せしや 太十二〇二十一―二十四
- 三、ガリラヤ海を初めて通玉ひし時如何なる奇蹟をなせしや 太八〇二十三―二十七
- 四、海の東岸よて如何なる奇蹟をなせしや 太八〇二十八―三十四
- 五、其後歸り玉ひしときよなし玉ひし四奇蹟を述よ 太九〇十八―三十四
- 六、ガリラヤ第三巡回傳道より歸りしとき如何なる大奇蹟をなせしや

七、其翌夜如何なる奇蹟をなせしや 可六〇四十五―五十一、

八、微行の間になせし五奇蹟を擧げよ即ちイエス傳道の終年の初半期中なり

可七〇二十四―三十三、三十一―三十七、同八〇一―九、二十二―二十六、同九〇十四―廿九、

九、イエスガリラヤにてなし玉ひし終の奇蹟の何なるや 天十七〇二十四―二十七、

第四 日課物語

此の章の課の此の前章の續として即ちイエスがエルサレムの滅亡と現世の終つき語り玉ひしことなり此の話の中に十人の童女銀錢の譬并に大審判の驚く可恐るべき有様を説き玉ふ十人の童女の譬の賢女五人愚女五人あり之れキリストの來るを常々怠らず預備すべきを教ふ銀錢の譬よてハキリストのために盡すべき機會を失はず用ゆることを教ふ大審判の説にハキリストが天使と偕に榮光をもて來る時の善惡者を分ち一を其右一ハ其左ハ恰も羊牧者が綿羊と山羊とを分つが如く惡者の永遠の刑罰を受け善者の永生を得ることを教ふ

第五 筆答問題

月曜日の課

十人の童女の譬 馬太傳二十五章一節より十三節

一、此の譬を委敷述よ 一―十二節

附言 ユダヤよてハ婚禮の新郎の家より新郎の家に行き先着を送るを以て

其婚禮の筵を祝するの例あり此の先行の屢々夜あすことあり故に燈

火を携ふの必用あり

二、何故五人の童女の愚なるや 二―四節

附言 此燈火の油と燈心との入れある小器あり此器を捧につけたいまつの

如く用ふ

三、彼等の燈は油の整へをなさざりし愚女の如何せしや 八―十二節

四、新郎との誰を指や何人の再来を茲に説しや

五、此譬の如何なることを教ふるや委敷述よ

火曜日 火曜日の課

銀錢の譬 馬太傳二十五章十四節より三十節 路十九〇十一—二十七引合へし

六、ある人三人僕よ何を予へしや其理由を述よ 十四、十五節

七、銀を受けし二人の僕は何をさせしや 十六節十七節

八、三人目のものの何をなせしや 十八節

九、主人の歸りしとき初の二人僕の如何なる報賞を得しや 十九—廿三節廿一節暗誦

十、三人目の惡者怠れる者に如何よせられしや 二十六節—三十節

十一、神の子へ玉ふ銀との何なるか如何に用ふべきものなるや

十二、此譬よ似たる譬を他よ語りしものを述よ 路十九〇十一—二十七

水、木曜日 水、木曜日の課

義人の裁判 馬太傳二十五章三十一節より四十節 (哥前十三〇引合)

馬太傳二十五章三十一節より四十節まで暗誦すべし

十三、大審判よつき如何よ語り玉ひしや 太二十五〇三十一—三十三、

十四、王の右に座すもの誰なるや其人々の何を嗣や 三十四節銘句

十五、彼等の善行をいかにして彰すや 三十五、三十六節

十六、誰よ彰すなるや 三十七節より四十節まで

十七、凡て王より命せられしとを喜びてあす人の如何なる精神をもちをるや

十八、如此精神をもつ事につきパウロの如何なることを曰るや 哥前十三〇、

金、土曜日 日課

不義ある人の裁判 馬太傳二十五章四十一節より四十六節

(太十三〇二十四―三十一、三十六―四十三、引合)

十九、王其左に居るものに何といふや 四十一節

附言 此の節に記す火の字義定まらず然れども此の悪者の上よ來るべき刑罰のいかに恐るべきかを示す語よして強く曰ひたるなり

二十、此の刑罰を受ける人々の何事をたれよあさいりし故なるや四十二節より四十五節

廿一、神の鹽よて之と等き主意よて如何なることを語りしや 太十三〇二十四―三十一、三十六―四十三

廿二、此章よての善悪者のキリストに由りて分たる、ことよつき如何なることを教ふるや

第四十一章 最後の諭過節並に晚餐の初まり

第一 日課

馬太傳二十六章一節より五節十四節より二十九節三十一節より三十五節

馬可傳十四章一、二、十節より二十五節二十七節より三十一節路加傳二

十二章一節より三十八節約翰傳十三章

紀元三十年第四月六日木曜日夕

銘句、われ新誠を汝等に予ふ即ち汝等相愛すべしとの是あり我汝等を

愛する如く汝等も相愛すべし 約十三〇三十四

馬可傳十四章十二節より二十五節まで朗讀すべし

第一 日課

日曜日 午後 馬太傳廿六章一節より五節まで同十四節より十六節迄

ニマの謀反

月曜日 馬可傳十四章十二節より十六節まで

諭過の預備

火曜日 路加傳二十二章十四節より十八節まで同二十四節より三十節

まで
弟子達の争

水曜日 約翰傳十三章一節より二十節まで

イエス弟子の足を洗ふ

木曜日 約翰傳十三章二十一節より三十五節まで

反心者を指名す

金曜日 馬太傳二十六章二十六節より二十九節まで

晩餐を始む

土曜日 路加傳二十二章三十一節より三十八節まで

ペテロの蹟を預言せらる

日曜日 午後二課

第二 復習問題

一 火曜日の夕カンラン山までイエス其弟子に如何あることを預言せしや

二 二人の子の來るの誰のみ知るべしと曰ひしや

三 イエスの弟子の常よ預備をなすべきことにつき如何ある譬を彼等に語りしや

四 其時他に語りし譬の如何

五 僕との誰をさすや

六 銀を我等に預けられしことまた夫れを使用するとは如何なることなるか

七 今日よて云へば三人目の僕との如何なる人をいふや

八 大審判の日を如何に説きしや

九 報賞を受るもの何人なるか又た何のために報賞を受るや

十 如何なる人が刑罰を受るや又たその受くる理由は何故なるや

十一 此章題如何

十二 其銘句を暗誦せよ

第三 聖書練習問題

イエス生涯中最終の六ヶ月の間になし玉ひし重なる奇蹟に就て記す

一、イエスガリヤに告別をなしてエルサレムに行く途中如何なる奇蹟をなせしや 路十七〇十一―十九、

二、エルサレムに着し後安息日に誰をいやせしや 約九〇一―十四、

三、ベタニヤよなせし大奇蹟を述よ 約十一〇一―四十六、

四、ベリヤよてなせし二奇蹟を述よ 路十三〇十一―十七同十四〇一―六、

五、エルサレム最後の旅行中エリコにていやせしもの誰なるや 可十〇四十六―五十二、

六、イエス生涯最終の二週間中にてなし玉ひし二奇蹟を述よ 太二十一〇十八―十九路二十二〇五十一、五十二、

七、イエス復生の後如何なる奇蹟をなせしや 約二十一〇一―六、

八、何故イエスの奇蹟をなし玉ふや

九、此等の奇蹟をなすの力を有ち玉ふことよより我人のキリストを如何なる

人とするや

第四 日課物語

エルサレムの滅亡と世の終との事よつき語り玉ひし後ふた、びベタニヤよ歸りそこよ翌日まで滞りしならん此時ユダのイエスを殺さんと謀りたる祭司長老等の許し行き金子を得てイエスを賣せり彼等大に喜び銀三十を以て約す(三十圓許實は最卑劣なる反逆人とも云ふべきなり)

木曜日午後即ち逾越節の第一日イエス十二人と偕に預め備へおきたる逾越節の食事をとらん爲よエルサレムにゆきて一小屋の二階に至る此に弟子等誰が大ならんかと互に争論を初めたりイエス彼等を訓んとて自ら立て弟子等の足を洗ひ玉ふ然後彼等の中よて一人イエスを賣さんものありと告玉ふ此時ユダイエスの己を知り玉ふを悟り直よ其席を退く彼の去りし後今日迄晚餐式として諸公會の守るところの食をとり玉ひ弟子等に其裂きし肉また流せし血の紀念のためパンと葡萄酒とをとりて予へ玉ふ

第五 筆答問題

月曜日の課

ユダの謀反 馬太傳二十六章一節より五節十四節より十六節

(可十四〇一二、十三、十四、路二十二〇一―六引合)

一、イエス大審判につきて語り玉ひし後二日にいたりて如何なることあらんといひ玉ひしや 太二十六〇一二、

二、此の時祭司の長等の家へ集まりしもの何人あるや其理由を述よ 三、四節

三、彼等の恐れしこと何なるや 五節

四、約せしもの誰なるや夫れ如何あることなりしや十四―十六節

路二十二〇三―六引合

五、ユダの此の如きことをせし理由を述よユダ如何ある人なりと考ふるや

火曜日の課

逾越節の預備 馬可傳十四章十二節より十六節

(太二十六〇七―十九、路二十二〇七―十三引合)

六、逾越節の何を祝ふなるや 出十二〇二十一―二十七、

七、逾越節の預備のため二人の弟子如何なることを命せしや可十四〇十三―十六預備のために如何あることが必要なるや

附言

逾越節の食事を食ふよの家族共へ集まりて食ふなり例によりて彼等の食事前午後三時より六時までの間に聖殿にて祭司によりて殺されたる羔を食ことなり

弟子達の争論 路加傳廿二章十四節より十八節二十四節より三十節まで

八、案に座せしとき弟子等互に如何なることを争しや 路二十二〇二十四、

九、如何なる点にて異邦人と異らざる可らざるか 二十五―二十七節

十、此につき以前述べし何時なるや 太二十〇二十一―二十八、

水曜日の課

イエス弟子の足を洗ふ 約翰傳十三章一節より二十節

十一、此時イエスの感情の如何ありしとヨハネの記しをるや 一、二節

十二、彼等のため何をおせしや何故なるや 三節―五節

十三、マテロ何と曰しやイエス如何に答へ玉ひしや 六節―十節

十四、イエスの自ら洗ひ玉ひしことの如何なることを意味するや 八節

答 罪の汚より清むるといふことなり

十五、此の手本より如何なることを教ふるや 十二―十七節

木曜日の課

反心者を指名す 約翰傳十三章二十一節より三十五節

(太二十六〇二十一―二十五、可十四〇七十一―七十二、路二十二〇二十一―二十三、引合)

十六、其時イエス其弟子の一人は如何あることをなさんとするものありと曰玉ひしや彼等如何に感せしや約十三〇二十一、二十二 太二十六〇二十一、二十二、引合

十七、イエスを賣渡すもの、知らせとして誰に如何なるものを予へしや

約十三〇二十三―二十六、

附言

此に記せるの逾越節のパンの一片を若き菜の汁に濡して食事に用ゆる

十八、其時ユダの何をなせしや 約十三〇二十七―三十、
かり案にて食するとき此の食物を予ふるの其善心あるを示すなり

十九、ユダの去りしのちイエス如何ある新 誠をいたし玉ひしや、約十三〇三十四、

金曜日の課

晚餐を始む 馬太傳二十六章二十六節より二十九節

(可十四〇二十一―二十五、路二十二〇十九、二十、哥前十一〇二十三―二十六、引合)

二十、イエスパンをとり如何にせしや又それよつき何と曰ひしや 太二十六〇
廿一、葡萄酒をとり如何になしまた何と曰しや 太二十六〇二十七、二十八、暗誦

廿二、何故今も基督信者の晚餐をまもるや 哥前十一〇二十六、暗誦

土曜日の課

ペテロの蹟を預言せらる 路加傳二十二章三十一節より三十八節

(太二十六〇三十一―三十五、可十四〇二十七―三十一、約十三〇三十六―三十八、引合)

廿三、其夜イエスのためよ弟子等よ如何あること起ると曰しや 太二十六〇三十一、

廿四、ペテロ何と答へしやイエス彼につき如何なることをなさんと預言なし
玉ひしや太二十六〇三十三、三十四 路廿二〇三十三、三十四、引合

廿五、此章に記する事蹟の起りの順序を記憶すべし

廿六、食事よ當りてイエスのなし玉へるうちまた曰玉ひしうちよて最も肝要
なること何なるや

第四十二章 イエスの最後の遺訓 第一部

約翰傳十四章十五章

紀元三十年四月六日木曜日夕

附言 此の遺訓の樓房にて食事を取りて其終に語りしなり

銘句 われ平安を汝等に遺す我平安を汝等より予ふ我あたふる所の世の子

る所の如きよあらずあんぢら心に憂る勿れ又懼るゝ勿れ約十四〇廿七

約翰傳十五章一節より十六節まで朗讀すべし

第一 日課

日曜日 午後 約翰傳十四章一節より十一節まで

イエス其弟子を慰藉す

月曜日 約翰傳十四章十二節より二十一節まで

聖靈を約束す

火曜日 約翰傳十四章二十二節より三十一節まで

聖靈のはたらき

水曜日 約翰傳十五章一節より八節まで

葡萄樹の比喩

木曜日 約翰十章一節より十八節まで

善牧者の比喩

金曜日 約翰傳十五章九節より十七節まで

イエスの愛

土曜日 約翰傳十五章十八節より二十七節まで

世界の人々の嫌惡するところ

日曜日午後の課 第二復習問題

一、今學びつゝあるの幾篇なるや

二、イエス此の週の水曜日何處まで過せしや

三、此時イエスを殺さんと企謀しもの誰あるや

四、如何なる約を誰となせしや

五、木曜日の夕何祝節始まりしや

六、其預備のため誰を遣はせしや

- 七、其預備の場所の何處なりしや
- 八、案につきし時弟子等互に私慾よりつき如何なる争論をなせしや
- 九、イエスの弟子に私慾のなきことにつき如何なるまを教しや
- 十、最もイエスを愛しむることの如何なることを告げし爲めなるや
- 十一、如何なるしるしを以て其叛逆者の誰なるかを示せしや夫を知りたるもの誰あるや
- 十二、如何なる新らしき誠を予へしや
- 十三、紀念のしるしとして如何なることを定めしや
- 十四、其夜ペテロの如何にせんと告げ玉ひしや
- 十五、此章題の如何
- 十六、其銘句を暗誦せよ

第三 聖書練習問題

新約全書諸巻の順序並に長短

附言

諸問題に答へんとするに先新約書を開き各巻幾枚あるやを見て知るべし此をなすときは各手帳にひかへかくこと肝要なり

- 一、新約書の諸巻を順次に述べよ
- 二、四福音中最長の巻の何なるかまた最短の巻の何なるか
- 三、四福音とパウロの手簡との間の何書あるや
- 四、馬太馬可路加約翰諸傳と使徒行傳との長短を比較せよ
- 五、パウロは幾何書をかきしや(著者の不明なるへブライ書を除く)
- 六、其書簡の中最長なるもの何書あるかまた最短なる何書なるや
- 七、パウロの書簡と他弟子の短き書との間にある長き書の何あるや
- 八、他弟子により書れし諸手簡を擧げよ各々幾何書をかきしや
- 九、此の書の最長きの何書なるや最短なる何書あるや
- 十、新約書の最終の何書なるや四福音使徒行傳手簡等と比較して其長さ如何

第四 日課物語

食事の終りし後イエス其弟子は最後の遺訓をなし玉ふ此の遺訓のイエスが是迄語り玉ひし教の中最も美しき慰ある幸福ある眞理を含むイエスのユダの手によりて賣され玉ふことまたペテロがイエスを知らずといはんと語り玉ひしをき、其弟子等互に心を煩せり然ども只イエスを信じなばおそれもかやみもなしこの彼等のために天父の家は所を備に行きふたゞ彼等を迎へんため來り玉ふを語る是時其弟子等のみを世は殘しおくを好み玉はず故に聖靈を降して其友また助者として彼等に遣し玉ふことを約す此時イエス葡萄樹のたとひを語り玉ふ即ち樹のイエス自をさし枝の其弟子として之につらなり以て天父により守護を受くるなり而てまたイエスを嫌ひ惡みしもの嫌われ彼のために如何なる迫害をも耐忍ものの賞揚せらるることを語り玉ふ

第五 筆答問題

イエス其弟子を慰む 約翰傳十四章一節より十一節
 一節の食事の時イエス如何あることをいひて其弟子達の心をなやませしか

太二十六〇二十一、二十二、三十一、

二如何なるよき語を以て彼等を慰めしや 約十四〇一―三
 三トマスに答へて自らをなんと云ひしや 五、六節使四〇十二

四、ピリポイエス如何あることを尋ねしや 八節

五、イエスと天父とにつき何と曰玉ひしや 九節終より十一節まで

月、火曜日 日の課

聖靈を約す 約翰傳十四章十二節より三十一節

六、イエスの世を去りしのうち其弟子達の如何なることをなさんと曰玉ひしや十二節

七、如何なる場合に於て祈願するものに答へあることを約し玉ひしや 十四節

八、キリストの名によりて願ふとの如何なることなるや

答 己の意の如くあすにあらすキリストの祈玉ひし同一の精神と事物を以て神に祈ることあり

九、如何にせばイエスを愛するあるや 十五節

十、イエス凡て其弟子に如何なる神聖の助を予へんと約せしや何故彼等のみなるや 十六、十七節

附言 慰師との他人をとりあす者或の他人を助くるといふ意也

十一、如何なる人にイエスと天父の借なり玉ふや 二十三節暗誦

十二、聖靈の何をなすと曰ひしや 二十六節

十三、如何なる貴き賜を弟子に殘せしや人の予ふる賜と異なる所の如何

二十七節録句

水、木曜日ノ課

葡萄樹の比喩 約翰傳十五章一節より八節 (約十〇一―十八、引合)

十四、イエスを何に比喩しやまた其天父を何とせしや 一節

十五、其弟子等を何に比喩しや如何よして果實を生ぎ得るや 二―五節

十六、イエスとともに居らざるもの如何になることあるや 六節

十七、彼とともに居るとの如何なる事なるや

答 彼を愛し彼よ事へるを云ふ

十八、如何にせば天父の榮をうくるや 八節

十九、イエス其弟子よつき如何なる比喻を語りしや 約十〇一―十八、

金土曜日 日課

イエスの愛と世の悪 約翰傳十五章九節より二十七節

二十、弟子達互に相愛することにつき何と曰ひしや 十二、十三節

廿一、如何なる特權を彼等より予へしや 十四、十五節

廿二、其報としてイエスの如何ある事を信者に要求玉ふや 十六、十七節

廿三、弟子等の世より如何にせらるゝや又たそのせらるゝの何故なるや

十八―二十一節

附言 世との神を信せざるものをいふなり

廿四、何故世のイエスを悪むことゆゑ能はざるや 二十二―二十五節

廿五、キリストの去りし後弟子等の重なる働の何なるや又た如何なる助を予へんと約せしや 二十六、二十七節

第四十三章 イエス最後の遺訓と終の祈禱

約翰傳十六章十七章

紀元三十年第四月六日木曜夕

銘句、われ汝に彼等を世より取たまへと祈らず惟彼等を守りて惡に陥らす勿れと祈る 約十七〇十五、

約翰傳十七章一節より二十六節まで朗讀すべし

第一、日課

日曜日 午後 約翰傳十六章一節より六節まで

世の迫害

月曜日 約翰傳十六章七節より十五節まで

聖靈の働

火曜日 約翰傳十六章十六節より二十四節まで

悲哀の後の喜

水曜日 約翰傳十六章二十五節より三十三節まで

キリストよより勝利を得

木曜日 約翰傳十七章一節より五節まで

イエスの犠牲の祈

金曜日 約翰傳十七章六節より十九節まで

十二弟子のため祈る

土曜日 約翰傳十七章二十節より二十六節まで

後日信徒となる人のために祈る

日曜日午後の課

第二 復習問題

一、イエス最後の遺訓をなし玉ふとき其弟子等になし玉ひし慰める約束の何ありしや

二、彼等を特ゝ惱まさんとすることにつき何を預言せしや

三、トマスに答て何と云ひしや

四、ピリポ如何なる問を出せしや

五、イエスを愛するところのもの如何にして其愛をあらはすや

六、弟子達に誰を送らんと約せしや

七、彼等に予へ玉ひし賜の最も貴きもの何なるや

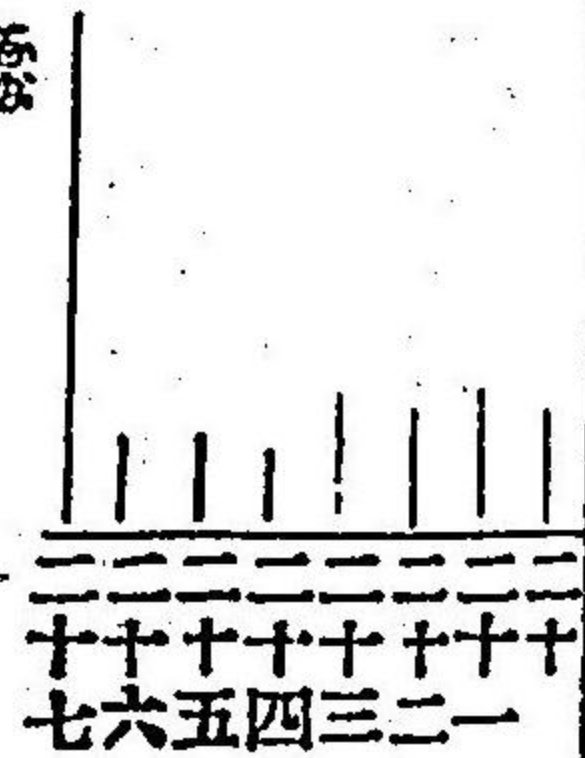
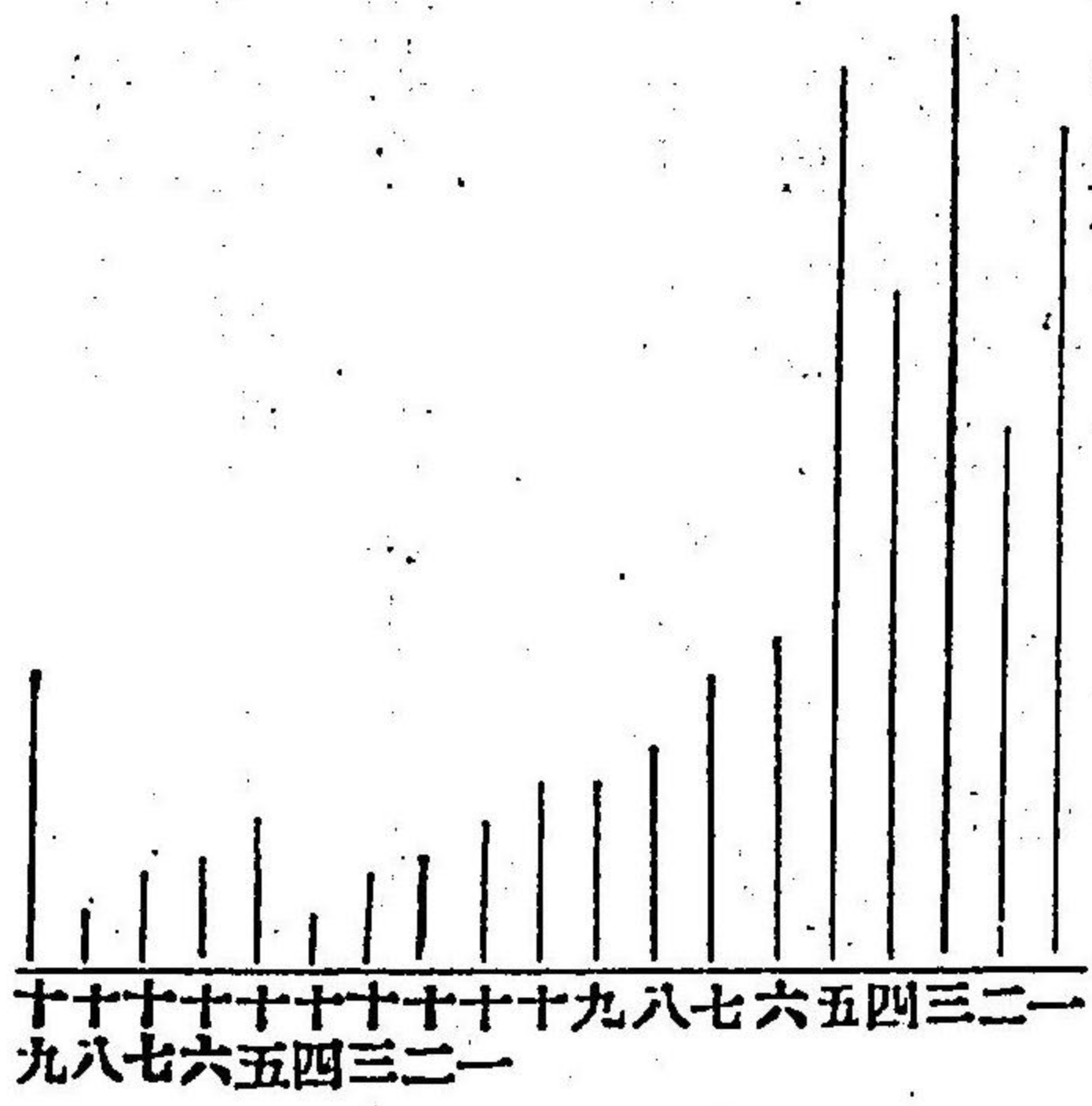
八、イエスと其弟子とにつき如何なる好き話を語りしや夫につき何を教るや

九、他人に對する最大愛の如何なることなるや

十、イエスの其愛を他人に如何にしてあらはせしや

十一、其弟子等を何と呼んと言しや
 十二、世の人の彼等を如何よなさんと言しやその何故あるや
 十三、此章題の如何
 十四、其銘句を暗誦せよ

第三 聖書練習問題
 新約全書の長短



右に記する線の新約全書諸巻の長さなり第一よ記すの馬太傳第二の馬可傳其他
 各線によりあらはしたる書名を名指し又其等の福音書なるか或の書翰あるかを記し又其作者の姓名を述よ

第四 日課物語

イエス最後の遺訓に於て其弟子達よ迫害の耐忍べきを告げ訓へ玉ふ其時また聖靈の大なる働き即ち人をして善悪を知らしむること且キリストの弟子をしてますく其主に事ふることを得せしむることを語り玉ふ時また曰けるの多の難悲の來らんとすれど後には大なる喜と代りキリストの世に勝玉ふ如く彼等も世よかつべしと教へ然る後にイエス其弟子と偕よ美しき終